# 萬葉集略解　六

柳田文庫
文庫11
A 104
10

# 萬葉集巻第六

雜歌

養老七年癸亥夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作歌一首并短歌　或本三首　車持朝臣千年作歌一首并短歌　或本二首

神龜元年甲子冬十月幸于紀伊國時山部宿禰赤人作歌一首并短歌

二年乙丑夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作歌一首并短歌　山部宿禰赤人作歌二首并短歌　○冬十月幸于難波宮時笠朝臣金村作歌一首并短歌

車持朝臣千年作歌一首并短歌　山部宿禰赤人作歌一首并短歌

三年丙寅秋九月十五日幸于播磨國印南野時笠朝臣金

文庫11
A104
10

柳田泉文庫

48 10648

村作歌一首并短歌（播を幡とあるハ本文と同しけれハ目ろくもかくもありしなるべし） 山部宿禰赤人作歌一首并短歌 過辛荷島時山部宿禰赤人作歌一首并短歌（辛ハ幸ノ誤） 過敏馬浦時山部宿禰赤人作歌一首并短歌

四年丁卯春正月勅諸王諸臣子等散禁於授刀寮時作歌一首并短歌（授ハ刀カ誤）

五年戊辰 幸于難波宮時車持朝臣千年作歌四首（千ハ干ノ誤）

同幸之時膳王作歌一首○太宰少貳石川朝臣足人歌一首 帥大伴卿和歌一首（大帥ハ帥ノ誤）○冬十一月太宰官人等奉拜香椎廟時帥大伴卿作歌一首 大貳小野朝臣老作歌一首 豐前守宇努首男人作歌一首○帥大伴卿遥思芳野離宮作歌一首○同卿宿次田温泉時聞



鶴喧作歌一首

天平二年庚午 勅遣擢駿馬使大伴道足宿禰等時勅使大伴道足宿禰饗帥家日葛井連廣成應聲吟歌一首○冬十一月大伴坂上郎女向京海路見濱貝作歌一首○冬十二月太宰帥大伴卿上京之時娘子作歌二首 大納言大伴卿即和歌二首

三年辛未 大納言大伴卿在寧樂家思故郷作歌二首

四年壬申 藤原宇合卿遣西海道節度使時高橋連蟲麻呂作歌一首并短歌（麻呂ハ磨ノ誤）○天皇賜酒節度使卿等御歌一首并短歌○中納言安倍廣庭卿歌一首（御ハ卿ノ誤）

五年癸酉 超草香山時神社忌寸老麻呂作歌二首（社ハ杜ノ麻）

○山上臣憶良沉痾之時歌一首○大伴坂上
呂を丸ニ誤 本文ニ依て改
郎女與姪大伴宿禰家持歌一首○安部朝臣蟲麻呂月
歌一首○大伴坂上郎女月歌三首○豊前國娘子月歌
一首○湯原王月歌二首
○藤原朝臣八束月歌一首○市原王
宴禱父安貴王歌一首○湯原王打酒歌一首○紀朝臣
鹿人松樹歌一首○同鹿人泊瀬河
歌一首○大伴坂上郎女詠元興寺之里歌一首○同郎
女初月歌一首○大伴宿禰家持初月歌一首○大伴坂
上郎女宴親族歌一首
六年甲戌 海犬養宿禰岡麻呂應詔歌一首○春三月幸
于難波宮時歌六首 作者未詳歌一首 船王歌一首



守部王歌一首 山部宿禰赤人歌一首 安部朝臣
豊繼歌一首○筑後守葛井連大成遥見海人釣船作歌
一首 按作村主益人歌一首
八年丙子 夏六月幸于芳野離宮時山部宿祢赤人應詔
歌一首 并短歌○市原王悲獨子歌一首○忌部首黒麻
呂恨友人賒来歌一首 本文ニ人字无 ○冬十一月葛城王等賜橘
姓之時御製歌一首○橘宿祢奈良麻呂應詔歌一首○
十二月葛井連廣成家宴歌二首
九年丁丑 春正月橘少卿 并 諸大夫等宴彈正尹門部王
宅歌二首 門部王 橘文明 本文橘宿祢文成とあり ○榎井王後追
和歌一首○春二月諸大夫等宴左少辨巨勢朝臣宿奈
麻呂家歌一首○夏四月大伴坂上郎女越相坂山時作

歌一首
十年戊寅　元興寺之僧自嘆歌一首○石上乙麻呂卿配
土左國時歌三首并短歌（々麻呂を麿ト誤）○秋八月右大臣橘家
宴歌四首（本文八月二十日とある[illegible]）
十一年己卯（々一を上ト誤）天皇遊獦高圓野之時獲遁走堵中小
獣擬獻御在所大伴坂上郎女作歌一首
十二年庚辰冬十月依太宰少貳藤原朝臣廣嗣謀反發
軍幸于伊勢國之時河口行宮内舍人大伴宿祢家持作
歌一首　天皇御製歌一首　丹比真人屋主歌一首
狹殘行宮大伴宿祢家持作歌二首　美濃國多藝行宮
大伴宿祢東人作歌一首（々藝を勢ト誤）大伴宿祢家持作歌一
首　不破行宮大伴宿祢家持作歌一首





十五年癸未　秋八月内舍人大伴宿祢家持讃久邇京師
作歌一首（本文八月十六日とある[illegible]）○高丘連河内歌二首○安積親王
宴左少辨藤原朝臣八束家之日内舍人大伴宿禰家持
作歌一首
十六年甲申　春正月諸卿大夫宴安倍朝臣蟲麻呂家歌
一首（本文正月五日とあり）○同月十一日登活道岡集一株松下飲歌
二首大伴宿祢家持市原王○傷惜寧樂京師荒墟作歌三首作
主未詳○悲寧樂故郷作歌一首并短歌○讃久邇新
京歌二首并短歌○春日悲傷三香原荒墟作歌一首并
短歌○難波宮作歌一首并短歌○過敏馬浦時作歌一
首并短歌

又此巻ハ養老七年より神亀次ニ天平十六年までの年号を挙られ、且卿大伴卿とのみ名を志るさぬハ家持でのもれ集らるゝを知べし

## 雜歌

養老七年癸亥夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作歌一首并短歌　倭紀ニ元正天皇此幸のよし見ゆ、金村傳志れず

瀧上之。御舟乃山爾。水枝指。四時爾生有。刀我乃
たぎのうへのみふねのやまにみづえさし志ゞにおひたるとがの
樹能。彌継嗣爾。萬代。如是二二知三。三芳野之蜻蛉乃
きのいやつぎつぎによろづよにかくし志らさんみよしぬのあきつの
宮者。神柄香。貴将有。國柄鹿。見欲将有。山
みやはかんがらかたふとからんくにがらかみがほしからんやま
川乎。清清。諾之神代從。定家良思母

かはせをきよみさやけみうべしかみよゆさだめけらしも

吉野の瀧の上なる清舟の山に、こつ枝ハこゞしく、若枝をさし、志づ枝ハ繁き之、刀鍛の木の枝栢、集中皆都賀の木のとあり、刀と称ふ
ときへバどこのとてもつぎ〳〵とつゞくへなれど、都の字ハ称かなしのふあれバ
かくハ刀ハ都の字れかくうち欠くるにハ刀とかなれるをやあらん、かくしの
しハ助辞なく、万代もかくのごとし志ろしめさんとの、神がら國がらのおもらハ
故のことを、神とハ此山をある神とけり、清き二字のうち一字ハ誤れるなら
む。誠にいたゞ峻清きさやまさくたゞん、志づのうちハたゞみさやけみと例べし、ほど
の下一句見くざるハ古本に例あれど、是ハなまての類のあまれバ志ゞのハあ
らじ。句の落てるなるらん、此離宮いつの時造られしの志られしむ、神代
よりひつぎ〳〵と神代よりさだめくし

反歌、

毎年如是裳見牡鹿、三吉野乃清河内之多藝津白波

としのはにかくもみてしかみよしぬのきよきかはちのたぎつしらなみ

としのハハ年ごとに此を出すべしぎおはそ新の詞、つを清るべし、痛の字なと出されど、

かゝる所ハ清溜よかくりしに字を借るる例多し、かはちハ河の巴れる所をいふ

山高三白木綿花落多藝追瀧之河内者雖見不飽香聞

やまたかみしらゆふはなにおちたぎつたぎのかはちハみれどあかぬかも

ゆふつくくれる花のちくちりてゆふハ木綿よいふ

或本反歌曰

神柄加見欲賀藍三吉野乃瀧河内者雖見不飽鴨

みづがきハ又すりしに向しおまられ猶の下之のよまをべし

三吉野之秋津乃川之萬世爾断事無又還将見

川の流るゝをたゆることなきにつゞけりなんとや

泊瀬女造木綿花三吉野瀧乃水沫開来受屋

たぎりおつる水の泡の木綿花のごとくにさくよ、大瀧といひて大石の間と斜に落る所、宮滝をいふとも又人のいへる

車持朝臣千年作歌一首并短歌　千年傳未詳、今千を于に誤、

元麿おもふに誤字

味凍　綾丹乏敷　鳴神乃音耳聞師　三芳野之

うまごりの　あやにともしく　なるかみの　おとのみききし　みよしのゝ

真木立山湯　見降者川之瀬毎　開来者　朝霧立

まきたつやまゆ　みおろせば　かはのせごとに　あけくれば　あさぎりたち

夕去者川津鳴奈辨　紐不解　客爾之有者　吾耳為而

ゆふされば　かはづなくなり　ひもとかぬ　たびにしあれば　あのみして

清川原乎見良久之惜裳

きよきかはらを　みらくしをしも



うまごりの枕詞、あやはあはれ、ともしくはめづらしきなり、なるかみの枕詞、

ゆふされば、かはづなくなり、辨ハ古本多く利に作るをよしとて、元麿本に

辨は利に作なり、まてはかの本なしとて、本辨の下詳の字あり、一本にかきてと

よしとて、ひもとかぬは、旅路にしあれば、経解してまろ寝するゆゑ、

あのみしては吾のみしてなり、みらくは見るを延たるなり、しは助辞、惜しも本情

これは誤れり、元麿本によりて改つ、しは助辞

反歌一首

瀧上乃三船之山者雖畏思忘時毛日毛無

たぎのへの　みふねのやまは　かしこけど　おもひわするゝ　ときもひもなし

畏くは、ゆゝしく、畏ハ見の隠なく、みつれどもなくべし、下句は

おもふ人を忘れぬことを、其末の句にいひてあるを互にしるべしといへるを

或本反歌曰

千鳥鳴三吉野川之音成止時梨二所思公

古葉略類聚鈔に成を茂に作え、磨本にまた志げと訓されど非也。之の下一本に川の字あるを、かはとなるべしと訓べし、川音のかはの字との訓はよろしからず

さらくこよしやこのはとよめるは、巻七に三吉野の滝のしらなみしらねども

おもひ

茜刺日不並二吾戀吉野之河乃霧丹立乍

あかねさして 枕詞、日ならべなくに八月をもまねくていふ ことのつゝきなるは、まへにもいひしなけきの意なり

右年月不審但以歌類載於此次焉或本云養老七年五月幸于芳野離宮之時作

神龜元年甲子冬十月五日幸于紀伊國時山部宿禰赤人



作歌一首幷短歌

續紀神亀元年十月天皇幸紀伊国癸巳行至紀伊国那賀郡玉垣頓宮甲午至海部郡玉津島頓宮留十有餘日戊戌造離宮於岡東云々又詔曰登山望海此間最好不勞遠行足以遊覽故改弱濱名為明光浦云々とみゆ

安見知之和期大王之常宮等仕奉流左日鹿野由

やすみしゝわごおほきみのとこみやとつかへまつれるさひかのゆ

背上爾所見奧島清波瀲爾風吹者白

そがひにみゆるおきつしまきよきなぎさにかぜふけばしらなみ

浪左和伎潮干者玉藻苅管神代從然曾尊吉

なみさわぎしほひればたまもかりつゝかみよよりしかぞたふとき

玉津島夜麻

たまつしまやま

わごハわかの浦也、さひかハ紀伊海部郡ニ雑賀の庄あり、若浦のちかき也、
常宮とよめるハ離宮之、宮也云、常宮ハとこみやとよむべし、常ハ借字也
てかつてのみことにて、志のぞハかしのごとぞ之

反歌

奥島荒礒之玉藻潮干満伊隠去者所念武香聞

おきつしまありそのたまもしほひみちいかくろひなバおもほえんかも

秘よせる藻のうちなるべく、さきの潮みちてかくれなバをしからんとなり

いハ發語、潮干満ハ潮干なるが後ニ満んとするをいふと宣長云つるを

若浦爾塩満来者潟乎無美葦邊乎指天多頭鳴渡

わかのうらにしほみちくれバかたをなみあしべをさしてたづなきわたる

かたとかくハ海の潟なる干潟のこゝなるをいふ、葦をとぞ本萋とあるハ
あやまりなるべし





右年月不記但偁従駕玉津島也因今撿注行幸年月以載之焉　偁とハ偁ニ従ひて偁ハ古称字之

神龜二年乙丑夏五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作歌一首 并短歌　續紀此年月ニ行幸を載ず

足引之御山毛清落多藝都芳野河之河瀬乃浄乎見者上邊者千鳥數鳴下邊者河津都麻喚百礒城乃大宮人毛越乞爾思自仁思有者毎見文丹乏玉葛絶事無萬代爾

あしびきのみやまもさやにおちたぎつよしぬのかはのかはのせのきよきをみれバかみへにはちどりしばなくしもへにはかはづつまよぶもゝしきのおほみやびともをちこちにしゞにしあれバみるごとにあやにともしみたまかづらたゆることなくよろづよに

如是霜顧跡。天地之。神乎曽禱。恐有等毛
かくしもがも　あめつちの　かみをぞいのる　かしこかれども
御山とは宮所あればいへり。上べ下べは上つ瀬下つ瀬也。大宮人もをちこちの
詞前なし。翁は是を見とがめていかゞにやとよまん。とゑがて
今は従駕のうち在京の友人はいかゞなる趣なりかとおもひやるべしといへ
きれど、ともかくもかくいふ。思自仁思有者は、繫くあれどといふ意
からぞ、たゞ自の意なし、さらばとひよまれどよまんといふ。されど旧稿
らぞ、字の法あるべし。按考てん。文の下丹を丹舟と誤れるし。元暦本によ
よむべし。扨つゝ、あやまりにいひて、ともしくはめつらしきよりいくゞにめでたき
ことゝ此歌をの万世かくのごとくあれかしと祈る様なり

反歌二首

萬代。見友将飽八。三吉野乃。多藝都河内之。大宮所



元去ヲ部二作

よろづよに　みともあかめや　みよしぬの　たぎつかふちの　おほみやどころ
みるともあかんやと

人皆乃。壽毛吾母。三吉野乃。多吉能床磐乃。常有沼鴨
ひとみなの　いのちもわれも　みよしぬの　たきのとこはの　つねならぬかも
元暦本等人と有。人のよをなまけいふのみしとこそは旧説之つね
ならぬもは説のゆくなあれかしと祈る意

山部宿禰赤人作歌二首并短歌

八隅知之。和期大王乃。高知為。芳野離者。立名附。
やすみしし　わごおほきみの　たかしらす　よしぬのみやは　たゝなづく
青墻隠。河次乃。清河内曽。春部着花咲
あをかきごもり　かはなみの　きよきかふちぞ　はるべははなさき
乎遠里。秋去者。霧立渡。其山之。彌益々爾

をゝりあきされバきりたちわたる。そのやまのいやますくに。
此河之絶事無。百石木能。大宮人者。常将通
このかはのたゆることなく。もゝしきのおほみやびとはつねにかよはん
離の下宮の字を衍せり。たゝなつく枕詞。ちかきごもりハ青山四方に
そばうちめぐれるさま。河なみとハ山を云るにて、上ハ春二ツをいひてあむ
をもて、こゝハ山のこと、此河のことハ、上山のかく此河のかくといひつと思ふべし
反歌二首
三吉野乃象山際乃木末尓波幾許毛散和口鳥之聲可聞
みよしのゝきさやまのまのこぬれにはこゝだもさわぐとりのこゑかも
象山ハよしのゝ内にあり。こぬれハこのうれの略なり。幾許ハこゝだとかきて
きよきせをいふなり
烏玉之夜乃深去者久木生留清河原尓知鳥數鳴





ぬばたまのよのふけゆけばひさぎおふるきよきかはらにちどりしばなく
ひさぎハ楸也。俗に木さゝげといふもの也
安見知之。和期大王波。見芳野乃。飽津之小野笑。野上者。
やすみしゝわごおほきみはみよしのゝあきつのをぬのぬのへには
跡見居置而。御山者。射目立渡。朝獦尓。十六
とみすゑおきてみやまにはいめたてわたしあさがりにしゝ
履起之。夕狩尓。十里蹋立。馬並而。御獦曽立為。
ふみおこしゆふがりにとりふみたてうまなめてみかりぞたゝせ
春之　茂野尓
はるのしげぬに
とみハ鳥獣の跡をかうがへみる人をいふ。射目ハいくらう射る
人をかくしおくところをいふ。波ともいへり。射固ともいふ

使ヲ今挾ニ誤

便ヲ今使ニ誤

猟ハ、古葉略要及ヒ唐本ニ射目とあるによれり。いるなるあて八年ふとる

べし也

反歌一首

足引之山毛野毛御猟人得物矢手挾散動而有所見

あしびきのやまにものにもみかりびとさつやたばさみさわぎてあるみゆ

さつやハ幸箭にて、獵矢也

右不審先後但以便故載於此次

有しかるかくいふべし

冬十月幸于難波宮時笠朝臣金村作歌一首并短歌

去年の幸にハ或日ハ …

續紀ニ此幸のこと見ゆ

忍照難波乃國者葦垣乃古郷跡人皆之念

おしてるなにはのくにはあしがきのふりにしさとゝひとみなのおもひ



為ハ無ノ誤

收ヲ元ニ治ニ作

息而都禮母無有之間爾續麻成長柄之宮爾

いきてつれもなくありしあひだにうみをなすながらのみやに

眞木柱太高敷而食國乎收賜者奥

まきばしらふとたかしきてをすくにをおさめたまへばおきつ

鳥味經乃原爾物部乃八十伴雄者廬為而

とりあぢふのはらにものゝふのやそとものをはいほりして

都成有旅者安禮十方

みやこなしたりたびにはあれども

おしてるハ、あしかき枕詞、おもひいきハひとしくおもむく、息の字ハ誤字なくん

ある枕詞にハあらんの考へし、つれもなく、為ハ無の誤也、事ニつれもなき

さかの山へに泣兒なるをて志うひきなりて、とにかくてつれなきことをいふ也

うみをなすて枕詞、ながらのみやハ、孝徳紀ニ難波長柄豊碕ニ

都遷しありてなり、なきうゐる枕詞、あぢふの原、和名抄東生郡味原ニ有、原をふとよむハ茅原茅原の類也、桓武紀攝津国鰺生野と有、八十伴のをハ、從駕の官人假廬ヲ居ラなどいふ、都ヲふうとハ幸ありて旅とハいへども都のゆしとしてなり

反歌二首

荒野等丹里者雖有大王之敷座時者京師跡成宿

あらのらにさとはあれどもおほきみのしきますときはみやことなりぬ

此里ハ荒野の中なりしをもいふ

海未通女棚無小舟榜出良之客乃屋取尓梶音所聞

あまをとめたなゝしをぶねこぎづらしたびのやどりにかぢのおときこゆ

棚なし小舟ハ既にいへり、たびのやどりハ旅人の假廬をいふ

車持朝臣千年作歌一首并短歌



五百ヲ誤テ百五トセリ

住ヲ往ニ誤

鯨魚取。濱邊乎清三。打靡。生玉藻尓。朝名寸二。千重浪縁。夕菜寸二。五百重波因。邊津浪之益敷布尓。月二異二。日日雖見。今耳二。秋足目八方。四良名美乃五十開回有。住吉能濱

いさなとりはまべをきよみうちなびきおふるたまもにあさなぎにちへなみよせゆふなぎにいほへなみよるへつなみのいやしくしくにつきにけにひびにみれどもいまのみにあきたらめやもしらなみのいさきめぐれるすみのえのはま

いさなとりハ枕詞、五百とも百五とせるハ誤也、邊津浪ハ濱邊の浪也、益しくしくハ頻なる也、けにハ殊也、銀ハ殊の誤なり、日にけにと同じ、ふみがほしきらん、あきたらめやもハ飽足らめやも也、いさきめぐれるハ、白浪の咲めぐる也、神代紀秀起浪穗之上云々、秀起此

云左岐陀豆麼とよめり、按ずるにこの麼は豆の誤なるべし、さきさてるとよむべきなり、されば、ハ浪寄りてさき
めぐるハ浪のたちく起ちめぐるといへり、住吉を住の江とも、又麼を手に作て
攺、住吉をすみのえとのみいへり、日吉日枝とかけるひえとよむがごとし、和名
抄にもすみよしと有るハ、文字によりて後よりしかもいひけん

反歌一首

白浪之千重来縁流住吉能岸乃黄土粉二寶比天由香名

しらなみのちへにきよするすみのえのきしのはにふににほひてゆかな

黄土一字ハ埴乃事なり、まそほ岸のをにふまなれハにはよしとなこといふ
なれど、紫土をも用ひてなす、ゆかなハゆかん也、粉ハ音を借てふの字用

山部宿禰赤人作歌一首并短歌

天地之遠我如 日月之長我如 臨照難波

あめつちのとほきがごとく ひつきのながきがごとく おしてるなにハ



乃宮爾 和期大王 國所知良之 御食都国 日之御調等

のみやに わごおほきみ くにしらすらし みけつくに ひのみつきと

淡路乃 野島之海子乃 海底 奥津伊久利二 鰒珠

あはぢの のしまのあまの わたのそこ おきついくりに あはびだま

左盤爾潜出 船並而 仕奉之 貴見禮者

さはにかづきで ふねなめて つかへまつるが たふときみれば

すめらぎをしてらします旬之、さて貴きものハいつも出して見るべし、み
けつ国ハ御食の物奉る国を云、日のみつきハ日次の貢也、おきの底深き所をいふ、
いくりハ海底の石也、あはびたま是ハ鰒の貝をいふ、さはハ多く也、たふ
ときハめでたきを云、海人どもがかく貢をいとなむを見れば

反歌一首

天地とともに久しく住なるを、とい

朝名寸二梶音所聞三食津國野島乃海子乃船二四有良信

あさなぎにかぢのときこゆみけつくにぬじまのあまのふねにあるらし

三年丙寅秋九月十五日幸於播磨國印南野時笠朝臣金村作歌一首并短歌　続紀云此月戊申幸云々

名寸隅乃船瀬従　所見淡路島　松帆乃浦爾　朝名藝爾

なきすみのふなせゆみゆるあはぢしままつほのうらにあさなぎに

玉藻苅管暮菜寸二藻塩焼乍　海未通女　有跡者雖聞

たまもかりつゝゆふなぎにもしほやきつゝあまをとめありとはきけど

見爾将去餘四能無者大夫之情者梨荷手弱女乃念

みにゆかむよしのなければますらをのこゝろはなしにたをやめのおも

多和美手俳徊　吾者衣戀流船梶雄名三



たわみてたもとほりわれはぞこふるふねかぢをなみ

なきすみ船瀬播磨なるべし。[illegible]

[illegible]従駕なる[illegible]播磨[illegible]淡路の

海人をとめの業を[illegible]歌[illegible]舟[illegible]

舟梶なくして[illegible]よめる

反歌二首

玉藻苅海未通女等見爾将去船梶毛欲得浪高友

たまもかるあまをとめどもみにゆかむふねかぢもがもなみたかくとも

往回雖見将飽八名寸隅乃船瀬之濱爾四寸流思良名美

ゆきめぐりみともあかめやなきすみのふなせのはまにしきるしらなみ

巻十七に[illegible]由伎米具利[illegible]

[illegible]

山部宿禰赤人作歌一首并短歌　たゞ同じ幸の時也

八隅知之。吾大王乃。神随。高所知流。稲見野能。
やすみしゝ。わがおほきみの。かんながら。たかしらしぬる。いなみぬの。
大海乃原笶。荒妙。藤井乃浦爾。鮪釣等。海人船
おふうみのはらの。あらたへの。ふぢゐのうらに。しびつると。あまのふね
散動。塩焼等。人曽左波爾有。浦乎吉美。宇倍毛釣者為。
さわぎ。しほやくと。ひとぞさはなる。うらをよみ。うべもつりはする。
濱乎吉美。諾毛塩焼。蟻往来。御覧母知師。清白濱
はまをよみ。うべもしほやく。ありがよひ。みまくもしるき。きよきしらはま

いなみ野ハ明石郡也、あらたへの枕詞、藤井の浦　和名抄播磨明石郡葛江布知衣、藤江の浦ならんとあれど、こゝも井江の通ふべし、和名抄鮪之比といへり、ありがよひハあまたゆききする也、さきくよかも幸しあひて見まくもしるきといふこと、但濱八白まなごこれといふ所もしらで地名なるべし、

反歌三首

奥浪。邊波安美。射去為登。藤江乃浦爾。船曽動流
おきつなみ。へなみしづけみ。いざりすと。ふぢえのうらに。ふねぞさわげる
不欲見野乃。淺茅押靡。左宿夜之。氣長在者。家之小篠生
いなみぬの。あさぢおしなべ。さぬるよの。けながくしあれば。いへししのばゆ

おしなべハおしなびけ、さぬるのさハ發語、しのばゆハ家のしのばるゝ也、くるしき

明方。潮干乃道乎。従明日者。下咲異六。家近附者
あかしがた。しほひのみちを。あすよりハ。したゑましけん。いへちかづけば
明石がたのしほひのみちをあすよりは心のうちによろこびてかへらんとなりといへり

敷ヲ今数ニ誤

過辛荷島時山部宿禰赤人作歌一首并短歌　和名抄播磨餝磨郡辛室加良千呂といへれど、あるはや、仙覚が引る播磨風土記を引て、韓荷島韓之破船所漂之物就此島故云韓荷島といへり

味澤相。妹目不數見而。敷細乃。枕毛不巻。櫻皮。

あぢさはふいもがめしばみずてしきたへのまくらもまかずかには

隈ヲ隅ニ誤

纒作流舟二　真梶貫。吾榜来者。淡路乃。野島毛

まきつくれるふねにまかぢぬきわがこぎくればあはぢのぬしまも

過。伊奈美嬬。辛荷乃島之島　際従。吾宅乎見者。青

すぎいなみづまからにのしまのしまのまゆわぎへをみればあを

山乃。曽許十方不見。白雲毛。千重爾成来沼。許伎多武流。

やまのそこともみえでしらくもちへになりきぬこぎたむる

浦乃　盡。徃隱。　島乃埼埼。隈毛　不置。憶曽

うらのことごとゆきかくるしまのさきざきくまもおかずおもひぞ

吾来。客乃氣長彌

わがくるたびのけながみ

味さはふ枕詞、妹がめしばしば見ずしてハ、しばしば見ずしてと云也、数の字ハ

衍文か、いもがめかれてとよみて、ことなしと、又宣長ハ不數見而とかかれ

てとよむべしといへり、しきたへの枕詞、敷とくは数に従ひ例によりて改つ

かにはまきハ、舟の舳を蕨縄してまきめぐらし、桜の皮にてまきたる

らん、いなみづまハ既にいへり、あをやまのそこともみえずハ、淡路嶋を西へこぎ

ればちての山も見えねとなり、こぎたむるハ漕廻るなり、浦のことごとハ

岸二おもせる間のことごとくにて、ゆきかくるハ舟

の嶋に隠るをいふ、隈ハ本隅とあれど、例によりて改。けながくハ

日久しくてなり

雅ハ居ノ誤

反歌三首

玉藻苅辛荷乃島爾島回為流水鳥二四毛有哉家不念有

六

たまもかるからにのしまにあさりするうにしもあれやいへをおもはざらん

稿本にしもあれやはあれうと説へてハきこゆるゆゑなり

ふりたりし

島隱吾榜来者乏毳倭邊上真熊野之船

しまがくれわがこぎくればともしかもやまとへのぼるまくまぬのふね

説あしきけるれバやまとのさくら舟のもやまきなどをうらやまさるす

やまとへるハ今一説して本人をもいへる家ニ従ていへり

風吹者浪可将立跡伺候爾都多乃細江爾浦隱往

かぜふけばなみのたゝむとさもらふにつたのほそえにうらがくれをり



きこゆるハ誤と見れバなるべし、もとのまゝ往居るゝ所のことぐとあるを

右の一句の海邊をさもらしける、先唐本往を居と解るもあるべし、説為

明石播磨くの

過敏馬浦時山部宿禰赤人作歌一首并短歌

御食向 淡路乃島二直向 三犬女乃浦能奥部庭 深海松採 浦回庭 名告藻苅 深見流乃見巻欲跡 莫告藻之巳名惜三 間使裳不遣而吾者生友奈重二

みけむかふあはぢのしまにたゞむかふみぬめのうらのおきべにはふかみるとりうらみにはなのりそかるふかみるのみまくほしけどなのりそのおのがなをしみまづかひもやらずてわれはいけりともなし

うけむかふ枕詞、みぬめは摂津、深見るはみまくといはん料、名のりそは

おのがなをいはん料のみ、ほけどはうれしきれどの略、間使は字のごとく

まつく清とよむべし、重二ハ四のうらく

反歌一首

爲間乃海人之塩焼衣乃奈禮名者香一日母君乎忘而将念

すまのあまのしほやきぎぬのなれなばかひとひもきみをわすれておもはん

塩やき衣ハなつかしくいはん爲に、そく馴さらバ思ひわすれんとて

あはんことハいはんとハ添へる詞の例也

右作歌年月未詳也但以類故載於此次

四年丁卯

春正月勅諸王諸臣子等散禁於授刀寮時作歌一首并短歌

続紀廢帝天平宝字三年十二月置授刀衛云々、同紀高野天皇天平神護元年二月改授刀衛爲近衛府云々、獄令義解云、凡禁囚





死罪枷杻婦女及流罪以下去杻其罪散禁云々、散禁ハ今禁足といふなるべし

真葛延春日之山者　打靡　春去徃跡　山上丹霞田名引　高圓爾　鶯鳴沼　物部乃八十友能壮者折木四哭之来繼皆石此續常丹有脊者　友名目而遊物尾　馬名目而　徃益里乎　待難丹　吾爲春乎　決巻毛　綾爾恐　言巻毛　湯湯敷有跡

まくずはふかすがのやまはうちなびくはるさりゆくとやまのへにかすみたなびきたかまとにうぐひすなきぬもののふのやそとものをかりがねのかくつぎてつねにありせばともなめてあそばんものをうまなめてゆかましさとをまちがてにわがせしはるをかけまくもあやにかしこしいはまくもゆゝしからんと

宮ヲ官ニ誤

豫. 蕪而 知者千鳥鳴. 其佐保川丹. 石二生.
あらかじめかねてしらせばちどりなくそのさほがはにいそにおふる
菅根取而. 之努布草解除而益乎往水丹. 潔而
すがのねとりてしのぶぐさはらへてましをゆくみづにみそぎてし
益乎天皇之. 御命恐. 百礒城之. 大宮人之. 玉
ましをおほきみのみことかしこみももしきのおほみやびとのたま
桙之. 道毛不出. 戀比日
ほこのみちもいでずこふるこのごろ

まくらことばハ蕩ハ知すたかのゆゑよいへるのに、すゑびく梅須、往ム住る
假名ハ誤也、此まゝならばまちがひならバみゆるく、ある本紛とも、折木四哭之ハ
まさゝさうしろのつよくよ時る月とよみ切木四之注きこゆれまもしくした、
此切木四之注五字かりがねとよめるとあて、こともかりがねの例、



此かざまに於てハ、くさかの説あれど、なほ字のうたがハしく来継皆石の字も
よみがたければ、誤字の説ともにくはしくいはん、或人云、折ハ斷の誤也、盃
莊子造鋸截斷木器とありて、四ハ器の誤なるべし、鋸のこぎりかくときて
ゆれバかりのこぎりなるを用ひたるなりといへり、来継皆石、前ハ皆ハ春の誤
なり、之来継春石五字をときつぎはるしとよむべし、さらバ盾ハ
ときつぎていはん枕詞とせん、こハその及次て立なるべしといへるらん
といふれど、契沖ハかりがねのときつぎみるもよく、四の字ハおろく
されど折木切木ハ同じく前とりをよみ、盾ハ用ふるべし、さて盾ハ友と
なしとするものなれバ、なほむらさきさうつぎてふことならんと
あるせざりしでなる人をなすのしハ助辞之正月の字あれバ盾の紛誤
るまかりくる時のなハうるまぞやと雅なる人あらん、之ハ只あなむら
のこひあへるを盾とよせていふなかりけるぞといへり、そ按ずる、

ちゝへの方ハ、雁の枕あしく、まゆあのきくるとしてよめるとハいへんなれど、巻十秋
の雁をよめる歌の中に、秋風に山とびこゆる雁がねハ弥遠ざかる雲がくれつゝ、
雲がくれ鳴ゆく雁がねの上をも秋鳴ゆく聲をもよめるが中に、雁が
ねきこゆるしまらしくてきこゆとよめれば、ちゝへ人ハ、まだ枕といふなど、辞と
しもゆけバ、秋さりよるもあるさらでもひろくよめるとなれバ、こゝハ、皆ハ
比日二字を一字に誤、石ハ如の誤なり、来継比日ハきつぎこのごろと訓
如此続ハかくつぎてと訓べし、宮も考に解今せり、さて、こゝハ宮もの
いつるごと、鷹ぞの八來つぎといふ序なり、きつぎハ其の文つぎて、此
時のごとくかくつぎて考にまちあはせバといふ、さて八十とものをと云ハ
友なめて、うつれ、決ハ鉄の字を誤るなるべし、ゆしうくんをあら
うがちハかくよくしかんとかねて知てあらバ、葛の根よりて
こゝハ様ハ昔なく掃清めれバ也、みぎハ水なく身をとくなる、





去年ハ葉ハさて八幡宮あしびで稚人、其御神のまゝの板びの思びぞかみて
出たるとかく散禁にあらんと疑て知せバ種勇にぎしくてさる君にあ
なきらん物をとぞ

反歌一首

梅柳過良久惜佐保乃内爾遊事乎宮動〻爾

うめやなぎすぐらくをしみさほのうちにあそびしことをみやもとゞろに

佐保のうちハ大和の佐保の地の内をいふ、其の時さらんとしみくも
遊びしを、宮中にさわぎてのゝしりし、又唐本動の下に之字をとられし

右神亀四年正月数王子及諸臣子等集於春日野而作打毬之楽、其日忽天陰雨雷電、此時宮中無侍従及侍衛、勅行刑罰、皆散禁於授刀寮而妄不得出道路、于時悒憤即作斯歌、作者未詳

和名抄打毬万利宇知と云ふ

五年戊辰

幸于難波宮作歌四首　神亀五年紀ニ幸行の事見えず、歌の左ハおぼつかなし

此諸詞ハ目録ニ宮下時の字あり

大王之界賜跡山守居守云山爾不入者不止

おほきみのさかひたまふとやまもりすゑもるといふやまにいらずはやまじ

さかひたまふハ領りて界を定むるを云、是ハ親のもる女をえがたきを喩ふ

見渡者近物可良石隱加我欲布珠乎不取不已

みわたせばちかきものからいそがくれかがよふたまをとらずはやまじ

かがよふハかがやくに同じ、あまびのえぬ隠れて見えぬをいひて、そをえがたき人目ふ

さくかびてけハまくて遠ざかる妹に譬ふるなり

韓衣服楢乃里之島待爾玉乎師付牟好人欲得

からころもきならのさとのしままつにたまをしつけんよきひともがも



巻十二　六左　穢衣著楢の里にありて、たゞならの里なるを、これにきたるといへり

といひのころも、純ハ着て見がゆきけもなくなりぬ、たゞ衣のなれたるを

綿のふるも、かんざしにかくるあら衣をいふべし。純ハ組みへ、むとしの〳〵ハ

砂蒔ならの里に住みける女の、うるはしきをよくみめでさせるを

ほしくおもふなり、玉をつけんやうに家をすべて下ろすやどの君わの樹子にしよしあれば、

こゝも島ハ君の住なく、好ハ取の子の住む、まなんといふきこえのさとのきみもかなる

ことおもふらん　ひとゝしつと訓べし、よりつる

竿壮鹿之鳴奈流山乎越将去日谷八君當不相将有

さをしかのなくなるやまをこえゆかんひだにやきみがはたあはざらん

杦枕ハこゝろ女をさしまつことへしくハ、旅ゆく人ハ、当の字

なるで、あえむしておんと訓べき

右笠朝臣金村之歌中出也或云車持朝臣千年作之也

云の下集の字脱か

膳王歌一首

朝波海邊爾安左里爲暮去者倭部越雁四乏母

あしたにはうみべにあさりしゆふされば やまとへこゆるかりしともしも

うらやましはあべく、あさりを集中求食とかけり、旅の京をうらやむべし、紀ハえの如

ゆるべし、ともしはうらやましと云ことを集中皆かけり

右作歌之年不審也但以歌類便載此次

太宰少貳石川朝臣足人歌一首

刺竹之大宮人乃家跡住佐保能山乎者思哉毛君

さすたけのおほみやびとのいへとすむ さほのやまをばおもふやもきみ

さすたけの枕詞、大伴ての家佐保にあればかくよめり、君とは旅人をさ

して、其さて旅人佐保に纏ふ故へ、なつかしの家をおもはざりやと云





みやこおもはるゝをいふか

帥大伴卿和歌一首

八隅知之吾大王乃御食國者日本毛此間毛同登曾念

やすみししわがおほきみのをすくには やまともここもおなじとぞおもふ

日本をやまとゝよむは大和国也、ここは太宰をさす、十八月よめるは旅太宰府にて

おなじことにおもふ

冬十一月太宰官人等奉拜香椎廟訖退歸之時馬駐于香椎浦各述懷作歌

神功紀皇后然熊襲を撃ちたまひて橿日宮より松峡宮に遷りたまひしことあり、又皇后橿日浦に還りたまひて、香椎廟は皇后をいはひまつるなるべし、和名抄筑前糟屋郡香椎加須比、筑前国風土記云、到筑紫国例先參謁于哿襲宮、哿襲可紫比也と有

帥大伴卿歌一首

去来兒等香椎乃潟爾白妙之袖左倍所沾而朝菜採手六
いざこどもかしひのかたにしろたへのそでさへぬれてあさなつみてん
あさなハ從者をさして、かたハ干潟也、朝菜ハ朝食の料に海藻つむといふの
たぐひ旅ぬらしとみしして袖さへといへり

大貳小野老朝臣歌一首　續紀天平九年六月甲寅太宰大貳從
四位下小野朝臣老卒とみゆ

時風應吹成奴香椎潟潮干納爾玉藻苅而名
ときつかぜふくべくなりぬかしひがたしほひのうらにたまもかりてな
ときつ風ハ汐のさしくる時の風をいふ、納ハ水の曲をいふ、刈てなハ刈てんと

豐前守宇努首男人歌一首

往還常爾我見之香椎潟從明日後爾波見縁母奈思
ゆきかへりつねにわがみしかしひがたあすゆのちにはみんよしもなし



磐ヲ盤ニ誤

師大伴卿遥思芳野離宮作歌一首

隼人乃湍門乃磐母年魚走芳野之瀧爾尚不及家里
はやひとのせとのいはほもあゆはしるよしのゝたきになほしかずけり
はやひとの枕詞をやがて薩摩としてよめり、和名抄薩摩出水郡勢度とぞ
云、薩摩ハ太宰の所部の国なれバ行てみられし、志のせとハ志
さやけらく

師大伴卿宿次田温泉聞鶴喧作歌一首　和名抄筑前御笠
郡次田

湯原爾鳴蘆多頭者如吾妹爾戀哉時不定鳴
ゆのはらになくあしたづはわがごとくいもにこふれやときわかずなく
湯原ハ温泉の邊を云、こふれやのハと異なり

天平二年庚午勅遣擢駿馬使大伴道足宿禰時歌一首

く本勅の字よりおほよそくなると、又唐本ハ门でなくなりて、下同じからハ
生つくき続くまらん、續紀和銅元年三月從五位下大伴宿祢道足爲
讃岐守とあり、こゝにも見ゆ

奥山之磐爾蘿生恐毛問賜鴨念不堪國

おくやまのいはにこけむしかしこくもとひたまふかもおもひあへなくに

岩にむす苔の苦むせるハ抽もごくおそろしげなる見ゆるを序として
かしこめるなり、卷七ニ奥山の岩ニこけむしかしこけど[illegible]
思ひあへなくハ、思ひ敢ずにてかたしと、宴に思ひがけず問はれしを
て吟ぜしなるべし

右勅使大伴道足宿禰饗于帥家此日會集衆諸相誘驛使葛井連廣成言須作歌詞登時廣成應聲即吟此歌

續紀天平三年正月授葛井連廣成外從五位下と見ゆ






冬十一月大伴坂上郎女發帥家上道超筑前國宗形郡名兒山之時作歌一首

郎女ハ安麻呂の女にて旅人卿の妹なり、旅人卿太宰帥にて在りし時、此郎女も太宰へ下りて旅人卿の家ニ在りしが、京へ上る時なり
よるなるべし

大汝　少彦名能　神　社者　名著始雞目　名耳乎
名兒山跡負而　吾戀之　千重之一重裳　奈具佐未七國

おほなむちすくなひこなのかみこそはなづけそめけめなのみを
なごやまとおひてわがこひのちへのひとへもなぐさまなくに

神代紀大己貴命少彦名命と力を一つにして天の下を經營し給ふ
よしあれバ、此二神の名づけ給ひしなるべし、和ぐるれバ名兒山ともいふ
卷七ニ名草山言ニシ有ケリ吾戀ノ千重ノ一重モ名草目名国と有
四訓なきあなくみてよめるハ、ても未ハ米の誤なるべし、又大汝の

貝ヲ貝ニ誤
拾ヲ拾ニ誤

句のうち招句のうしが落しまゝ又反歌もうしが傳へぬなるべし

同坂上郎女海路見濱貝作歌一首　元暦本郎女の下向京二字あり

吾背子爾戀者苦暇有者拾而将去戀忘貝

わがせこにこふればくるしいとまあらばひろひてゆかんこひわすれがひ

冬十二月太宰師大伴卿上京時娘子作歌二首　目録に

よろし時の上之の字あるべし

凡有者左毛右毛将為乎恐跡振痛袖乎忍而有香聞

おほならばかもかもせんをかしこみとふりたきそでをしのびたるかも

おほなとその人ならば袖をもふらんを貴人なればかしこみて袖ふらずとぞ

かもかもハとにもかくにも

倭道者雲隠有雖然余振袖乎無禮登母布奈

やまとぢはくもがくれたりしかれどもわがふるそでをなめしとおもふな



日ヲ日ニ誤

なハ先帰路の遠さをいひてしかれども見えずなるまでハ袖をふらんをなげけしとなる思ひのひとかるべし

右太宰師大伴卿兼任大納言向京上道此日馬駐水城顧望府家于時送卿府吏之中有遊行女婦其字曰兒島也於是娘子傷此易別嘆彼難會拭涕自吟振袖之歌

大納言大伴卿和歌二首

日本道乃吉備乃兒島乎過而行者筑紫乃子島所念香裳

やまとぢのきびのこじまをすぎてゆかばつくしのこじまおもほえんかも

神代紀吉備子洲を生とあり　こじまハ備前なれども都へのぼる道なれバ

やまと路といへり　娘子が名兒島なれバ吉備の児島をとほる時思はんと也

丈夫跡念在吾哉水莖之水城之上爾泣将拭

ますらをとおもへるわれやみづくきのみづきのうへになみだのごはん

天智紀三年十二月ニ、是歳對馬島壹岐島筑紫國等ニ防と烽
と置、又筑紫ニ大堤を築て水を貯、名づけて水城といへりと。水城の
よしいひてほめたるといふべし。みづくきは室ちらみづくしき堂といへる
枕詞にて、みづきを辛きねさらんといへり。者七ことづくきのをこのみちくの
よりなし、もに丈夫と細をかくみこつれまこつれ作もひをせん

三年辛未大納言大伴卿在寧樂家思故郷歌二首
須臾去而見壯鹿。神名火乃淵者淺而瀨二香成良牟
志ばらくもゆきてみてしかかみなびのふちはあさびてせにかなるらん
故ヽは神名備里く去ぐしのよも絶てらんと絶せん。地の言さらとあせ
といふ。あさびの後ちをきること
指進乃栗栖乃小野之芽花將落時爾之行而手向六
さしずみのくるすのをぬのはぎがのちらんときにしゆきてたむけん



さしずみの枕詞、和名抄大和忍海郡栗栖、くるすの小野はそこなるべし
あさはおれバりてよめらんこれはそをおぬべしといへく。なをの神ハよろこびのみ祖
の基をまつるせんとなるべし

四年壬申藤原宇合卿遣西海道節度使之時高橋連蟲麻
呂作歌一首并短歌　續紀天平四年八月丁亥從三位藤原朝臣宇
合爲西海道節度使、同紀天平九年八月丙午參議式部卿兼太宰帥正
三位藤原朝臣宇合薨、贈太政大臣不比等之第三子也とあり
白雲乃。龍田山乃。露霜爾色附。時丹。打超而。
しらくものたつたのやまのつゆじもにいろづくときにうちこえて。
客行公者。五百隔山。伊去割見。賊守。筑紫爾至。
たびゆくきみはいほへやまいゆきさくみあたまもるつくしにいたり。
山乃曾伎。野之衣寸見世常。伴部乎。班遣之。山彥乃。

やまのそきぬのそきみよと、このべとわのちつかさしやまびこの
将應 極。谷潛乃。狭渡 極。國方乎見之賜而。
こゝんきはみたにぐゝのさわたるきはみ、くにがたをみしたまひて
冬木成。春去行者。飛鳥乃。早 御来。龍田道之
ふゆごもりはるさりゆけばとぶとりのはやくきまさねたつたぢの
岳邊乃路爾。丹管士乃。将薫 時能。櫻花。将開時
をかべのみちにつゝじのにほはんときのさくらはなさきなんとき
爾山多頭能迎 參出六 公之来益者
にやまたづのむかへまゐでんきみのきまさば

きつゝじのハまへといへるの枕詞、露霜ハ露と霜とをいへるあらぞよ
あなたゝほふべし、いゆきさくみハ岩ニ石根左久見てなづみこと
そいハ發語、おちまゐるハ西蕃の賊を守るために筑紫のさきぐ





防人ときしむかへハ山のそきこゝのそきにハよるもいへるぬく、
遠く敵をまもるに古事記ニ曽牟岐袁理(ソキヲリ)母和礼和須礼米夜(ワレワスレメヤ)と
あるも此そきへ谷ぐゝハ国のはてのミ、国のかたちをみるまで遠し
いふかし、冬木成の成ハ盛の誤なるべし、いつゝ、みかるのぬくも
くゆきまぜてとて、たつたハ紅躑躅へ、さくハ咲る、迎へんといふなる
なをもまゐでんハ君のめぐみにあるといふん也

反歌一首

千萬乃軍奈利友言擧不爲取而可来男常曽念
ちよろづのいくさなりともことあげせずとりてきぬべきをのことぞ思ふ
千元唐本ニ手とあるはよれど、ことあげハ神代紀興言又ハ高言とかわ
まことハあの始まつのいきほひをいへるをとりてきこゆ

右檢補任文八月十七日任東山山陰西海節度使 そもち

反人の注く

天皇賜酒節度使卿等御歌一首并短歌　天皇ハ聖武天皇之

続紀天平四年正三位藤原朝臣房前為東海東山二道節度使従三位多治比真人県守為山陰道節度使従三位藤原朝臣宇合為西海道節度使とし給へるによる御の下製の字あるべし

食国　遠乃御朝庭爾　汝等之　如是退去者　平久

をさめくにのとほのみかどにいましらのかくまかりなば[ゆけば]たひらけく

吾者将遊　手抱而　我者将御在　天皇朕　宇頭乃御手

われはあそばんたむだきてわれはいまさんすめらわがうづのみて

以　掻撫曽　祢宜賜　打撫曽　祢宜賜　将還来日

もてかきなでぞねぎたまふうちなでぞねぎたまふかへらんひ

相飲　酒曽　此豊御酒者

あひのまんきぞこのとよみきは

たむだくは紀に拱をたむだくと訓たり。手むだくは身抱とかくにてあやまりと云へ書武成に垂拱而天下治とある注に垂衣拱手而天下自治とあり。うづのみてもて、宇頭は祈年祭祝詞に皇御孫命能宇豆能幣帛とあるに同じく貴きよし。うづは尊き事をいふ。すめら我は大御手をもてひとりひとりかきなでぞなどいふは、かきは詞のあや。ねぎはねぎらふなり。労はるなどいふ。打撫もかき撫に同じ。此酒は大御酒也。此時酒を賜ふる給へは、丈夫幸くて還来ん時、此大御酒をきこしめしてさかほかひせんとのたまへる

反歌一首

丈夫之去跡云道曽凡可爾念而行勿丈夫之伴

ますらをのゆくといふみちぞおほろかにおもひてゆくなますらをのとも

管ヲ菅ニ誤

おかろつハおわよそてへまちてくとのゆくひぞくへきりてるなるぞ、おか
よそりまくちくそくおさやあつく

右御歌者或云太上天皇御製也　元正天皇也、文暦本小字にかく
入あれハえなりきしなるへし

中納言安倍廣庭卿歌一首　續紀天平四年二月中納言從三位兼催造長官知河内和泉等國事阿倍朝臣廣庭薨と見ゆ

如是為管在久乎好叙靈剋短命乎長欲為流

かくしつゝあらくをよみぞたまきはるみじかきいのちをながくほりする

あらくとよみぞハ、あるをよくしてぞといふ、何すの歎をいふよみあるらん

五年癸酉超草香山時神社忌寸老麻呂作歌二首　草香ハ河内國河内郡

難波方潮干乃奈凝委曲見在家妹之待將問多米



なにはがたしほひのなごりよくみてないへなるいもがまちとはんため
ちかひのあとふハ跡也、なごりハ見の下君の字あり、君ハ名の誤なるべし
と宜べし、そでふハ見てんと思へハ、おしてる難波とよみてくなるらし　草香
の山をみれば、わが越くれバ[illegible]

直超乃此徑爾師弖押照哉難波乃海跡名附家良思裳

たゞこえのこのみちにしておしてるやなにはのうみとなづけけらしも

古事記大長谷若建命自日下之直越道幸行河内云々、此言のおし
てるハ河内國より直路に押越て難波へ出れバかくハいへる也、枕詞のおし
てるなれど、此をよしと思ふべけれど、或人のいへるハよしと謂辞考
にいへり、宜ちかき二の句ハ結句へかゝれり、おしてるやハ難波海へかゝれり、此言
ハ三四一二五と句をつゞけて見べし、ぐおしてるの事久老考あり、海上のる
きてえづのなるをとそもてう[illegible]といへり、併考べし

山上臣憶良沈痾之時歌一首

士也母空應有萬代爾語續可名者不立之而

をのこやもむなしかるべきよろづよにかたりつぐべきなはたてずして

男子やといふべく

右一首山上憶良臣沈痾之時藤原朝臣八束使河邊朝臣東人令問所疾之状於是憶良臣報語已畢有須拭涕悲嘆口吟此歌　續紀神護景雲元年正月從六位上川邊朝臣東人授從五位下とみゆ　須の下更を脱せるにやと契沖いへり

大伴坂上郎女與姪家持從佐保還歸西宅歌一首

吾背子我著衣薄佐保風者疾莫吹及家左右

わがせこがけるきぬうすしさほかぜはいたくなふきそいへにいたるまで

けるハきたるといふのちゞまりたる也、巻十五なつごろもひとしくあか許能



安我家流いとうごろものあつくされバなど、きぬ風ハ疵る風かどうがゐく、にそ不ま吹風ともろ

安倍朝臣蟲麻呂月歌一首　續紀天平勝宝四年三月中務大輔從四位下安倍朝臣虫麻呂卒とみゆ

雨隱三笠乃山乎高御香裳月乃不出来夜者更降管

あまごもりみかさのやまをたかみかもつきのいでこぬよはふけにつつ

雨ごもり枕詞、更くるを集中ふくつとよめり

大伴坂上郎女月歌三首

𩿞高乃高圓山乎高彌鴨出来月乃遲將光

かるたかのたかまとやまをたかみかもいでくるつきのおそくてるらん

姓氏録右京諸蕃雁高宿祢の氏あれバ地名也

烏玉乃夜霧立而不清照有月夜乃見者悲沙

ぬばたまのよぎりのたちておぼゝしくてれるつくよのみればかなしさ

月ハきり立ちたると、きりにおぼゝれてまなこをえみがたしとかなしハ
然の意きこえ、月夜の光きえてゞつゞけたり

山葉左佐良榎壮子天原門度光見良久之好藻

やまのはのさゝらえをとこあまのはらとわたるひかりみらくしよしも

さゝらハ小さき也、さゝら形の如くなといへるも文の細かなるといへり、えをとこハ美きを
さゝら月と名のつけり、みらくハ見るを延へたる詞、しハ助辭

右一首歌或云月別名曰佐散良衣壮士也縁此辭作此歌

旅人の名入る

豊前國娘子月歌一首 娘子字曰大宅姓氏未詳也

雲隱去方乎無跡吾戀月哉君之欲見為流

くもがくれゆくへをなみとわがこふるつきをやきみがみまくほりする



指を以て数ふきハ何ともかくあらむとこよひの月をとちえんざらめやと
いふ心也

湯原王月歌二首

天爾座月讀壮子幣者將為今夜乃長者五百夜繼許増

あめにますつきよみをとこまひハせんこよひのながさいほよつぎこそ

月よみをとこハ月を云、まひハまひなひ也

愛也思不遠里乃君來跡大能備爾鴨月之照有

はしきやしまぢかきさとのきみこんとおほのびにかもつきのてりたる

大のび徒従徒がらし、誤ありしこの、おし大野方のことゝ考へし、君が
あひみるみ月もてらせるかといふなるべし、宣長ハ君来跡之我待ま
らもとよしの誤れるといへり

藤原八束朝臣月歌一首

巖ヲ嚴ニ磐ヲ盤ニ誤ス

待難爾余爲月者妹之著三笠山爾隱而有来

まちかてにわかするつきハいもかきるみかさのやまにこもりてありけり

妹かきる枕詞、いまた出ぬ月をいふなり

市原王宴禱父安貴王歌一首

春草者後波落易巖成常磐爾座貴吾君

はるくさハのちハうつろふいはほなすときはにいませたふときわかきみ

義ハ春草ハ秋枯るれバうつろふなるいはほハよはひ久しきを、

祝詞ニ堅磐ニ常磐ニ齋比奉といふがごとく、ときハとこいはの約也、

木の常葉といふことを此下にかくして遊びのことにあまたもちふる也

て秋ハ落るをとあれバ、落易かれやすしともよむべし

湯原王打酒歌一首　宣長云打ハ祈の誤なるべし、さかほかひのうたとよむ

ぞといへり



焼刀之加度打放丈夫之禱豊御酒爾吾醉爾家里

やきたちのかどうちはなちますらをのほくとよみきにわれゑひにけり

焼刀ハやき刀をいふ、かどハ稜をいふべし、しのぎをけづるといふなれバ、

つるぎハつむがるの約すれバかくもいふべし、稜ハ賀以て半るく、

のむと訓く飲ミてされバ、されたの市原王の歌の湯にほぎことによる

稜の字を用ひられバ、こでもほぐの意なるべし

紀朝臣鹿人跡見茂崗之松樹歌一首　續紀天平九年九月己亥

位より外従五位下を授く、跡の字を落せり一本によりて補

茂岡爾神佐備立而榮有千代松樹乃歳之不知久

しげをかにかむさびたちてさかえたるちよまつのきのとしのしらなく

こハ鹿人の跡見の庄の家にてよめるなるべし、

千代待といふにや

鳥ヲ烏ニ誤 奴ハ好ノ誤

同鹿人至泊瀬河邊作歌一首

石走多藝千流留泊瀬河絶事無亦毛来而将見

いはばしるたぎちながるゝはつせがはたゆることなくまたもきてみむ

石ばしる 枕詞

大伴坂上郎女詠元興寺之里歌一首

古郷之飛鳥者雖有青丹吉平城之明日香乎見樂思奴裳

ふるさとのあすかはあれどあをによしならのあすかをみらくしよしも

元興寺ハ飛鳥にありしを、飛鳥より奈良へうつしてそこをも飛鳥といへり、

旧本ニ云、奴ハ好の誤れるなるべし

同坂上郎女初月歌一首

月立而直三日月之眉根掻氣長戀之君爾相有鴨

つきたちてたゞみかづきのまゆねかきけながくこひしきみにあへるかも



紀此ノ下 云ヲ脱ス 今補

三日月ハ眉といへる所のこと、是を初月と称せるハいふなり、おもふに、のこゝろハおもひわたりの意

大伴宿禰家持初月歌一首

振仰而若月見者一目見之人之眉引所念可聞

ふりさけてみかづきみればひとめみしひとのまよびきおもほゆるかも

仲哀紀如美女之睩有向津國 睩此云麻用弭枳 宋玉招魂 蛾眉曼睩 なども見ゆ

大伴坂上郎女宴親族歌一首

如是為乍遊飲與草木尚春者生管秋者落去

かくしつゝあそびのみこそくさきすらはるはおひつゝあきはちりゆく

草木すら春ハおひつゝ秋ハかれゆくをあなるとねがへる、與ハ乞の誤なるべし

六年甲戌海犬養宿禰岡麻呂應詔歌一首 歌の上作のうちなるべし

御民吾生有驗在天地之榮時爾相樂念者
みたみわれいけるしるしありあめつちのさかゆるときにあへらくおもへば
あへらくハあへるを延たる也、和名抄古本ニ日本紀私記云人民比度久佐或説於保多加良とあれバおほみたからわれらも訓べけれど、巻一にさわぐ御民ミタミもよめれとみたみとよめり訓了

春三月幸于難波宮之時歌六首　續紀天平六年三月辛未幸あり

住吉乃粉濱之四時美開藻不見隱耳哉戀度南
すみのえのこはまのしゞみあけもみずこもりてのみやこひわたりなん
粉濱住吉ニある地名なるべし、字鏡蜆小蛤之自弥とあり　しゞみハ貝也
又しゞみ貝のごと閉て慶ニをもひこの表志をあらはさず川とよめれバ
從駕の女房を恋るなるべし、あまりハ女房をいふなるべし





右一首作者未詳

如眉雲居爾所見阿波乃山懸而榜舟泊不知毛
まゆのごとくもゐにみゆるあはのやまかけてこぐふねとまりしらずも
眉のあハ書紀を引るごとし、かけてハ阿波の山へ懸て行也

右一首船王作　續紀天平十五年五月從四位下より從四位上を授

從千沼囘雨曾零來四八津之白水郎網手綱乾有沾將堪香聞
ちぬまよりあめぞふりくるしはつのあまあみてつなほせりぬれあへんかも
ちぬハ古事記五瀬命ニ云く到血沼海洗其御手之血故謂血沼海也とぞ
紀ニ河内国泉郡茅渟海ともいひ、續紀靈亀二年三月割河内國和
泉日根兩郡令供珍努宮ニとあるも、ちぬハ和泉也、志はつハ既ニ出
住吉の事也、白水郎ハ泉郎と書るを誤れる也、網一本綱ニ作る

説一本の縄ハ誤なるべし、綱手綱とあらつるを訓んか、綱の大づなるべしといふ
色なきハされどさる詞なしやもがつのうし、又一本綱と細く作れり、按る綱ハ
綱の誤なるべし、綴手縄とあるしの、さらハつなでなと訓べし、舟の大綱なれバ
たへんうもハ用なきを誤しといふべく

右一首遊覧住吉濱還宮之時道上守部王應詔作歌

とゝ本王の字なし、一の王ハ衍文なれバ除つ、続紀天平十二年正月無位より
従四位下を授く

兒等之有者二人将聞乎奥渚爾鳴成鶴乃暁之聲

こらこがあらバふたりきかむをおきつすになくなるたづのあかときのこゑ

右一首守部王作

こらこハ女の妹とさせり

丈夫者御猟爾立之未通女等者赤裳須素引清濱備乎





ますらをハみかりにたゝしをとめらハあかものすそひくきよきはまびを
たゝしハたちを延たる也、まびハ濱方也

右一首山部宿禰赤人作

馬之歩押止駐余住吉之岸乃黄土爾保比而将去

うまのあゆみおさへとゞめよすみのえのきしのはにふににほひてゆかん

止一本上に作る、是の誤なるべし、黄土ハはにふと訓べし、にほふハ其色の移る事也
てらしそむよハ従五位下

右一首安倍朝臣豊継作 続紀天平九年二月外従五位下より従五位下を授く

筑後守外従五位下葛井連大成遥見海人釣船作歌一首

海嬬嬬玉求良之奥浪恐海爾船出為利所見

あまそゝめたまかもむらし、おきつなみかしこきうみにふるぞせかこゆ
むへなるあそびに、舟出せなと世て、見ゆといへるはちへぶなく

桜作村主益人歌一首

不所念来座君乎佐保川乃河蝦不令聞還都流香聞

おもほえずきまさるきみをさほがはのかはづきかせずかへしつるかも

思ひもかけずよりかへしつるかもと悔てつゞくべし、後のあそばせば、ちそましきべし

右内匠寮大属桜作村主益人聊設飲饌以饗長官佐為王未及日斜王既還帰於時益人怜惜不厭之帰仍作此歌

後紀天平九年八月中宮大夫兼右兵衛督正四位下橘宿祢佐為卒

ともゆ、

八年丙子夏六月幸于芳野離宮之時山部宿祢赤人応詔作歌一首并短歌

後紀[聖武]六月乙亥此幸のよしなく



八隅知之我大王之見給芳野宮者山高雲曽軽引河速弥湍之声曽清寸神佐備而見者貴久宜名倍見者清之此山乃尽者耳社此河乃絶者耳社百師紀能大宮所止時裳有目

やすみしゝわがおほきみのみしたまふよしぬのみやはやまたかみくもぞたなびくかはちかみせのとぞきよきかんさびてみればたふとくよろしなへみればさやけしこのやまのつきばのみこそこのかはのたえばのみこそもゝしきのおほみやどころやむときもあらめ

そこなふハさせそ、よろこびて山をとりよ、よろしなへ川をほえいへり、此詞所ま、此山河の絶えんまのみこそ此宮所も止時もあらめ、さでハ

止时ちうんなりて

反歌一首

自神代芳野宮爾蟻通高所知者山河乎吉三
かみよゝりよしぬのみやにありがよひたかくしらせるはやまかはをよみ
山と川とよし、ハ、ことはいふべし

市原王悲獨子歌一首

不言問木尚妹與兄有云乎直獨子爾有之苦者
こととはぬきすらいもとせありといふをたゞひとりごにあるがくるしさ
いもとせとは人の子の兄弟をいふ。木すら藤のまつひて子孫
ありてさかゆるに、このあれがひとりごなるゆゑ、一向のさびしさに、因列らるいく
まうし生まるとは、なるといふ。拾遺集哥のみや子なるてふ事の
その人の子なる枝も子も有るゆゑ、契沖云、兄弟ありとあるも、
ありもあるは二つあるとよしませても此王のむねの五百井女王の
事は此猶子とみて此女王あるべしといふは、さきのれども市原王能登内

親王と安宿王五百井女王五百枝王なる後紀に見えたれば人の子の
よしをみませしなるべし。春王の名も五百井女王のことをよしありといふ
説なし

忌部首黒麻呂恨友賒来歌一首　後紀宝字三年十二月忌部
首黒麻呂等賜姓連よしあり

山之葉爾不知世經月乃将出香常我待君之夜者更降管
やまのはにいさよふつきのいでんかとわがまつきみがよはくだちつゝ
月を待ふしき友を待つ君のまちぬるといふへいさよふは第三いさよふ原
のゆくへしらずいさよふなみにとよめる同しくても月のいでんとして
たゆたふ様といへり。十六夜をもいざよひの月とよめるはいで後へ君がの
たちまちにしてきよ語と思ふは、巻七山の端にいさよふ月といでんとおもふ
よるは來ぬ、此君いさよふ月といふとも来ぬ詩とらんよは

辨ヲ臣ニ誤

[illegible]

冬十一月左大辨葛城王等賜姓橘氏之時御製歌一首　今本左大臣とあり一本臣を辨に作るによれり、續紀天平元年九月正四位下葛城王為左大辨、同十五年五月以右大臣從一位橘宿祢諸兄拜左大臣とあり、日紀賜橘姓とあり

橘花者實左倍花左倍其葉左倍枝爾霜雖降益常葉之樹

たちばなはみさへはなさへそのはさへえだにしもふれどいやとこはのき

さくの詞ハそのくへと又その後めくるく詞なり、ここちしは冬枯せぬとも、常磐なるきはなく、續紀養老五年詔曰其地者皆殖常葉之樹云々、橘ハ實も花もめでたく、葉もおけどもいよ栄ゆるとよみてほめ給へる

とらへく

右冬十一月九日從三位葛城王從四位上佐為王等辭



宮ヲ為ニ誤

皇族之高名賜外家之橘姓已訖於時太上天皇皇后共在于皇后宮以為肆宴而即御製賀橘之歌并賜御酒宿禰等也或云此歌一首太上天皇御歌但天皇々后御歌各有一首者其歌遺落未得探求焉今檢案内八年十一月九日葛城王等願橘宿禰之姓上表以十七日依表乞賜橘宿禰　續紀天平八年十一月葛城王佐為王上表橘宿祢の姓を賜らんことを乞によりて、詔して橘宿祢を賜よしみゆ、同紀天平勝宝二年正月左大臣橘宿祢諸兄に朝臣姓を賜よしみゆ、太上天皇ハ元正天皇也、於時太上天皇の下天皇二字を落せるか、或皇后二字を天皇と混れるにや、下に共在于皇后宮とあれハ皇后といへるにてしかおもはるゝなりけし

橘宿禰奈良麻呂應詔歌一首　奈良麻呂ハ諸兄公の男也、續紀天平十二年五月無位より從五位下を授、寶字元年六月左大弁にて逆謀ニ

真ヲ直ニ誤

興ヲ與ニ在ヲ有ニ誤

よるは語の作の字ならん

奥山之真木葉凌零雪乃零者雖益地爾落目八方

おくやまのまきのはしのぎふるゆきのふりはますともつちにおちめやも

なハふるといひて名のミ姓を賜る語に辞皇族之高名請外家之橘姓尋思所執成得時宜一依表令賜橘宿祢千秋万歳相継無窮とあるをことは

てえるを賜ふるれハ事ハ侍るとしなるをハくるしといへるなるべし

冬十二月十二日歌儛所之諸王臣子等集葛井連廣成家宴歌二首

比来古儛盛興古歳漸晩理宜共盡古情同唱此歌故擬此趣輙獻古曲二節風流意氣之士儻在此集之中争發念心々和古體

我屋戸之梅咲有跡告遣者来云似有散去十方吉

わがやどのうめさきたりとつげやらばこちてふににちりぬともよし

二十ちかくハまれにしげく咲をとめて、かく若やかすハまれなりと

いふをかへてみてもひたるをしへし必語ひ事るべし、さて後ハ花ハおちぬ

ともよしといへるなり

春去者乎呼理爾乎呼里鶯之鳴吾島曽不息通為

はるされバをゝりにをゝりうぐひすのなくわがしまぞやまずかよハせ

をゝりハ集中をりをりいふ、又られたらむなどいひてしげく枝さしお

ほく花の咲るをいふ、されバ花のしげき咲る也、説常の

ことといへり、巻三十三なる檜の村をゝりるも巻十三三芳野の山ハ咲をゝり

るとも、花をゝりといふ、そのおもしのていふなくしもをとりをいふもとし

花とよりせるを、わが鳴ハ家の庭に植れる池の中嶋なるをいふべし、言ちまま

嶋ハ池をいふ、いせ物語に嶋ものみ見つなとぞいへり

九年丁丑春正月橘少卿并諸大夫等集弾正尹門部王家宴歌二首　少卿ハ橘宿祢佐為をいふ

豫公来座武跡知麻世婆門爾屋戸爾毛珠敷益乎

あらかじめきみきまさんとしらませばかどにもやどにもたましかましを

つまびらかなし

右一首主人門部王　後賜姓大原真人氏也　一本此注なし

前日毛昨日毛今日毛雖見明日左倍見巻欲寸君香聞

をとつひもきのふもけふもみつれどもあすさへみまくほしききみかも

巻十七にをとつひもとみえて乎登都日毛きのふもけふもなどあればをとつひと訓べし

右一首橘宿祢文成　即少卿之子也　一本此注なし　続紀天平勝宝二年九月

賜文成王甘南備姓とあり、橘氏を再び改て甘南備の姓を賜ひたるや



榎井王後追和歌一首　続紀宝字六年正月无位より従四位下を授く、志貴親王の子なり

玉敷而待益欲利者多鶏蘇香仁来有今夜四楽所念

たましきてまたましよりはたけそかにきたるこよひしたのしくおもほゆ

たけそかは集中たゞこゝにのみいへる詞なれど、そのことばのさまを合せ考るに

ゆくりなくといふ意にてあらんといへり、猶考べし

春二月諸大夫等集左少弁巨勢宿奈麻呂朝臣家宴歌一首　続紀神亀五年五月正六位下より外従五位下を授

海原之遠渡乎遊士之遊乎将見登莫津左比曽来之

うなばらのとほきわたりをみやびをのあそぶをみんとなづさひぞこし

遊士をみやびをと訓るよしいへり、なづさひは水に漂ふをいふ、なづさひ来るといひて、仙女の蓬莱より遠き海路を渡来るよし、あるじの女房などの縁

みちのく路に紛る莫ハなきにしもあらねど奥の誤なるべし

右一首書白紙懸著屋壁也題云蓬莱仙媛所嚢蘰為風

流秀才之士矣斯凡客不所望見哉 本集ニ嚢ハ賚の誤なりと云り、

字ありて賚ハ賜之とあり、本集ニ所の下一本作字あり、されバ嚢ハ嚢の

誤、蘰ハ謾の誤なるべく仙媛所作曷謾為風流秀才之士矣なるべし

夏四月大伴坂上郎女奉拝賀茂神社之時便超相坂山

望見近江海而晩頭還来作歌一首 神名帳山城國愛宕郡賀

茂別雷神社、賀茂御祖神社二座とあり、相坂ハ神功紀忍熊王兵

を曳て退、武内宿祢兵を出して追て逢坂に遇り、故号て逢坂といふなど

木綿畳手向乃山乎今日越而何野邊尓廬将為子等

ゆふだゝみたむけのやまをけふこえていづれのゝべにいほりせんこら

子等一本吾等とも、われと例べし、ゆふだゝみ手向の山ハ則逢坂山



の坂なるべし、岩三作保るそ奈良の方よりおくぬさ山よりたむけ

ハ奈良坂のことをいへり、枕言人のさまよ向ふる所なる所より子ハ

從へる女房などをさしていふべし、こらと訓もよし

十年戊寅元興寺之僧自嘆歌一首 嘆一本賛とせり、續紀霊亀

元年五月始建元興寺于左京六條四坊ニ、同紀養老二年八月遷

法興寺於新京ニと、元亨釋書ニ元興寺者上宮太子討守屋時蘇

馬子又誓営寺、故於飛鳥地創之、推古四年成、始曰法興寺とあり

白珠者人尓不所知不知友縦雖不知吾之知有者不知友

任意

しらたまハひとにしらえずしらずともよし、しらずともわれしれらば

しらずともよし

旋以言之自ら白玉にたとへたるか明らけし

右一首或云。元興寺之僧獨覺多智未有顯聞。衆諸狎侮。
因此僧作此歌。自嘆身才也　嘆一本賛ニ作ル
石上乙麻呂卿配土左國之時歌三首并短歌　續紀天平十
一年三月石上朝臣乙麻呂坐姧久米連若賣配土左国。若賣配下総国とあり
乙麻呂とかく十年の中に歌ハ[illegible]なるなれハ此歌の中石上振の尊とい[illegible]
しこを次なるハ乙麻呂妻作歌とあるべきを、諸伯の文字落しなるべし[illegible]
こゝハ何れ乙麻呂を見送れる歌なるべし
石上。振乃尊者。弱女乃。惑爾縁而。馬自物。
いそのかみ。ふるのみことは。たわやめの。まどひによりて。うまじもの。
縄取附。肉自物。弓笑圍而。王。命恐。
なはとりつけ。しゝじもの。ゆみやかくみて。おほきみの。みことかしこみ。
天離。夷部爾退。古衣。又打山從。還來奴香聞

あまざかる。ひなべにまかる。ふるごろも。まつちのやまゆ。かへりこぬかも
石上布留ハ[illegible]石上氏ハ[illegible]物部氏なると[illegible]
[illegible]されバ石上布留とつゞけたり。みな[illegible]
なるを[illegible]とて、たをやめのまどひによりてハ[illegible]
[illegible]久米連若賣を姧したるをいふ。うまじものハ[illegible]
いてからめられたるを[illegible]ゆみやかくみて[illegible]
[illegible]の[illegible]をかこみてまもりゆく[illegible]古衣[illegible]まつち
山の[illegible]一首[illegible]まつち山[illegible]
[illegible]
王。命恐見。刺並之。國爾出座耶。吾背乃公矣
おほきみの。みことかしこみ。さしならぶ。くにゝいでますや。わがせのきみを
[illegible]或人の[illegible]此王命恐ミとハ次なる[illegible]出座の

菅ヲ管ニ誤

繋ノ誤 繫

下文字脱せり。國尓出座ゝ○はし○き○耶つ、吾背乃君矣繋巻裳、ゆゝしとつく

え、本ニ十九もしくは虚とはかく和我勢故君乎懸麻久乃由ゝ志恐伎ことゝ

を合せてしるべきなり、いつまで此後にくはしく、さしつかへは其れよりの指並隣の国

いとまうさくハ紀伊とちれしはなくさ[illegible]しるべし

繋巻裳湯湯石恐石。住吉乃荒人神。船舳尓。牛吐

かけまくもゆゝしかしこし。すみのえのあらひとがみ。ふなのへにうしはき

賜。　付賜将。　島之埼前。　依賜将。　磯乃埼前。

たまひ。つきたまはん。しまのさきざき。よりたまはん。いそのさきざき。

荒浪。　風尓不令遇。草管見。　身疾不有。　急

あらきなみかぜにあはせず。くさづゝみ。やまひあらせず。すむやけく

令變賜根。　本國部尓

かへしたまはね。もとつくにへ



大かたいへるがごとく、王の命恐みの事とは其の神をさすべし。こゝに繋は繫の字の

誤れるなり。荒人神、景行紀日本武尊曰、吾是現人神之子也。和名抄現

人神 安良比止加美 とあり。こゝは其神をさしまをせり。さてこの荒人神といへるは

つかさは人は大の誤にて、あらみかみとまをす。神功紀に神有誨曰和魂(にぎみたま)は王身

につきて、王命を守り、荒魂(あらみたま)は先鋒と為して、師船を導くといへりといふて

見えき。船の舳にうしはき給ふよし也。草づゝみ[illegible]、賜将は下上をさるわざ

まるれど、[illegible]かゝる所あれば将をむのよみたるものにかくおもひて、又急は美

十五須年也氣久 とあるによりて志うよむべし、たまへるはたまへと延たる、

国部は国方べ、本の書に二その文字は落ちしなるべし。又古の文

法の神の[illegible]にいへる事あれとしてこの文を[illegible]、次の[illegible]

文字落失しとしられど、古の書には乙麻呂での[illegible]されば[illegible]語

詞なることを見も落したるなり

父公爾。吾者真名子叙。妣刀自爾。吾者愛兒叙。参昇。
ちゝぎみにわれはまなごぞ。はゝとじにわれはめづこぞ。まゐのぼる
八十氏人乃。手向為等。恐乃坂爾。幣奉。吾者叙
やそうぢびとの。たむけすと。かしこのさかに。ぬさまつり。われはぞ
追。遠杼土左道矣
おへる。とほきとさぢを

そも麻呂ての事ハ、まなごハ真の子といふ也、めづこハ愛子也、めづらしきの句
の下略也なりぎと疑しきるべし、宣長まゐのぼるハ麻呂ての乃がる
[illegible]かくこの坂にてつく詞也、さて八十氏人との二句ハたゞ恐といはん序也、
[illegible]むといひつゞけざまんとにつり、手向為の下等の字一本に
なし、かくこの坂ハ倭より河内へ越る所の坂也、天武紀に将軍吹負と紀
臣大音を遣て懼坂を合せ守らしむ、財等懼坂を退て大音の営に居るとと



すめらぎのみことにて麻呂その罪くはれはるおへる、ちがひ兄になきの淺と知べし、
又大みことをもて思ればさるぞや重しれて宣長ハ追ハ退の誤とい
ありし元来つるなし

反歌一首

大埼乃。神之小濱者。雖小。百船純毛。過迹云莫國
おほさきの。かみのをばまは。せばけれど。もゝふなびとも。すぐといはなくに

大埼ハ紀伊国なり、紀伊のうみわたしよりきこゆ七神前あり[illegible]
うちわたしよるべきとよ[illegible]かぎりとかなかつる所なればなるべし
小濱も同所なるべし、宣長大埼みさきにて紀伊にあれど、また一つの名とハ
いふべしといひて考べし、百船純はまにもかく言ひ、純一のことにて
ひとのうへに用ゐる例、神代紀純男をひたをとこ、訓へハ[illegible]
ある事を我のたま[illegible]といひ又[illegible]の[illegible]のうへ[illegible]さくるとよ

よるべし

秋八月二十日宴右大臣橘家歌四首

長門有奧津借島奧真經而吾念君者千歳爾母我毛

ながとなるおきつかりしまおくまへてわがおもふきみはちとせにもがも

かりしまもつの嶋は、おくまへて心にふかくおもふよしにいひ、おくめてとめは

まへの歌に、集中ふかくおもふとおくまへてといへり、おくまてといへる例

哥にかれたる但馬の地名といひ出て

右一首長門守巨曾倍對馬朝臣　後紀天平四年八月山陰道節度使判官巨曾倍津島に外從五位下を授らるゝ

奧真經而吾念流吾背子者千年五百歳有巨勢奴香聞

おくまへてわがおもへるわがせこはちとせいほとせあらこせぬかも

せこは對馬をさして、あらこせぬはあれかしと祈る意



右一首右大臣和歌

百磯城乃大宮人者今日毛鴨暇無跡里爾不去將有

もゝしきのおほみやびとはけふもかもいとまをなみとさとにゆかざらん

里は家をいふ、こは宴にあづかれる人々、きくらえで何かしら詠じたるなるべし

右一首右大臣傳云故豐島采女歌

橘本爾道履八衢爾物乎曾念人爾不所知

たちばなのもとにみちふむやちまたにものをぞおもふひとにしらえず

巻二三方沙弥娶園臣生羽之女ころ、橘の花ちるさとのやちまたの心とや

林は家にあはずて、いふことおもふなるべし

右一首右大弁高橋安麻呂卿語云故豐島采女之作也但或本云三方沙彌戀妻苑臣作歌也然則豐島采女當時當所口吟此歌歟

たゞ巻二にあるをもてかくいへるなり、一二

こゝに考ていてまさしのふハあとの集にあらすまとてし、豊島ハ和名抄摂津豊島

島天之万、武蔵豊島止志とかいづれよしもの

泄一本通ニ作堵一本都ニ作目録里之ノ二字无

十一年己卯天皇遊獦高圓野之時小獸泄走堵里之中於是適値勇士生而見獲即以此獸獻上御在所副歌一首

獸名俗曰牟射佐妣 大和添上郡高圓、和名抄鼯鼠一名鼺鼠毛美俗云無佐々比云々、今下野

二荒山のほとりハ樹よりとふかりとりて俗のむさゝびといふもの

大夫之高圓山爾迫有者里爾下来流牟射佐妣曽此

ますらをのたかまとやまにせまれゝばさとにおりくるむさゝびぞこれ

右一首大伴坂上郎女作之也但未逕奏而小獸死斃因此獻歌停之

十二年庚辰冬十月依太宰少貳藤原朝臣廣嗣謀反發軍幸于伊勢國之時河口行宮内舍人大伴宿禰家持作歌一首



続紀天平十二年九月丁亥廣嗣遂起兵反同年冬十月壬午行伊勢国云々是日到山邊郡竹谿村堀越頓宮癸未車駕到伊賀国名張郡十一月甲申朔到伊賀郡安保頓宮宿大雨途泥人馬疲煩乙酉到伊勢国壹志郡河口頓宮謂之関宮也丙戌遣少納言従五位下大井王并中臣忌部等奉幣帛於大神宮車駕停御関宮十箇日とあり、廣嗣ハ式部卿馬養之第一子なり、天平十年十二月太宰少弐と見ゆ

河口之野邊爾廬而夜乃歴者妹之手本師所念鴨

かはぐちののべにいほりてよのふればいもがたもとしおもほゆるかも

右ハ続紀とりあはせ十月二日河口頓宮にやどりしてよめる也、妹のふれて

ありとくすくらとは下同じ

天皇御製歌一首

妹爾戀吾乃松原見渡者潮干乃潟爾多頭鳴渡

いもにこひあがのまつばらみわたせばしほひのかたにたづなきわたる

いもにこひ枕詞、吾ハあごとよみて、志摩英虞郡へあごとかけたるハ吾王

の集中和朝 吾朝などよめるにてかはりし類の例なく、冠辞考に委しく

いはれたるを見るべし、吾のあごを守るの意もいつらく五口をあごとよむハ、吾王とつゞけ時よ読る

るをまへハ、てへつゞく故におのづからごといへるなり、吾をあごとよむこと

吾自松原 わがてつばらえ 自ハ乃よ読るに同じ、これハよみて、待の意もまつへかゝる枕詞也、いで

みまれたり、松原よわたりいへる地名にあらぬといへど、巻十七に安我

松原欲(ヨ)こゝろせハよしよめれハ、此説によるべし

右一首今案吾松原在三重郡相去河口行宮遠矣若疑御在朝明行宮之時所製御歌傳者誤之歟

丹比屋主真人歌一首 後人の作く 後紀宝字四年三月散位従四位下多治比真人家主卒と見ゆ





後爾之人乎思久四泥能埼木綿取之泥而将住跡其念

おくれにしひとをおもはく 土でのさきゆふとりしでてゆかんとぞおもふ

刺ノ下にいひるを述る、土では垂の意とい人に住よりては往の誤なり、考に四泥

山路へうせる作挽の誤たりとへし、其の義ヲ見ゆるとまへるを頭(ゴ)よりての

み英虞郡なるべきよしの説されど神名帳伊勢国朝明郡志氏神社

あり、朝明ハ三重よりつゞれハそこの所といへるなるべし、考にの作挽の誤の

作も詩ノ信の誤よろしく、それになるべきを巻四にいへるも、心ハ挽にしよ浴よ

まろ妹をおもひて神よ行つ行く

右案此歌者不有此行宮之作乎所以然言之勅大夫従河口行宮還京勿令従駕焉何有詠思泥埼作歌哉 後人の

狭残行宮大伴宿禰家持作歌二首 先も同じ幸の度るれハ河口

行なるを

のぞ行幸より出みなひとゞがよみおくりきし、おもらべし、さてむとよりあんか行考べし

天皇之行幸之隨。吾妹子之手枕不巻。月曾歴去家留

おほきみの
すめろぎのいでましのまにまわぎもこのたまくらまかずつきぞへにける

御食國志麻乃海部有之。眞熊野之小船爾乘而奧部榜所見

まふへはまくらかく

みけつくにしまのあまならしまくまぬのをぶねにのりておきへこぐみゆ

おきべは沖邊なり。志摩の浦然も浦邊はつきもれど、

るは始よしあしへの行考べし

美濃國多藝行宮大伴宿禰東人作歌一首

續紀に養老元年九月丁未天皇行幸美濃國、戊申行至近江國觀望淡海云云、甲寅至美濃国云云、丙辰幸當耆郡多度山美泉云云、甲子車駕還宮、十一月癸丑天



皇臨軒詔曰朕以今年九月到美濃国不破行宮、留連數日、因覧當耆郡多度山美泉、自盥手面、皮膚如滑、亦洗痛處、無不除愈、在朕之躬、甚驗、又就而飲浴者、或白髮反黒、或頽髮更生、或闇目如明、自餘痼疾皆平愈云云、改霊亀三年為養老元年云云とあり

從古人之言来流老人之變若云水曾名爾負瀧之瀬

いにしへゆひとのいひくるおいびとのわかゆちふみづぞなにおふたぎのせ

人のいひくるハ言傳ふる也、わかゆハ若ゆる也と同

大伴宿禰家持作歌一首

田跡河之瀧乎清美香從古宮仕兼多藝乃野之上爾

たどのかはのたきをきよみかいにしへゆみやつかへけんたぎのぬのへに

たど河ハ多度山を流るゝ河也、みやつかへハつかへまつる也

即

不破（フハ）行宮大伴宿禰家持作歌一首

關無者還爾谷藻打行而妹之手枕巻手宿益乎

せきなくはかへりにだにもうちゆきていものたまくらまきてねましを

考十七の巻にも近かが挙利尓太仁もうちゆきて妹がてまくらさしかへてねてもこましをとよめり八假字ニ云ヲの作てましと有ヲ

ちるからちハ詞のミ

十五年癸未秋八月十六日内舎人大伴宿禰家持讃久邇京作歌一首　續紀天平十三年十一月戊辰右大臣奏為大養徳恭仁大宮とこゆ

今造久邇乃王都者山河乃清見者宇倍所知良之

いまつくるくにのみやこはやまかはのきよきをみればうべしらすらし

高丘（タカヲカ）河内（カフチ）連歌二首　續紀神亀元年五月正六位下樂浪河内賜姓

高丘連とも見ゆ

萬解六　四十九

故郷者遠毛不有一重山越我可良爾念曾吾世思

ふるさとはとほくもあらずひとへやまこゆるがからにおもひぞわがせし

一重山ハ一重の山をよまく也ヲへてさて一隔山さしるらかのとく

もとの都も遠からねハ隔りて思ふ

吾背子與二人之居者山高里爾者月波不曜十方余思

わがせこと ふたりしをれば やまたかみさとにはつきはてらずともよし

このせこハ友をさして山守月をも滿てらるゝ

安積親王宴左少辨藤原八束朝臣家之日内舎人大伴宿禰家持作歌一首　安積親王聖武子也

久堅乃雨者零敷念子之屋戸爾今夜者明而将去

ひさかたのあめはふりしけおもふこがやどにこよひはあかしてゆかん

おもふこゝろハあるすぢハ東紀にといへる文おりすゝ　おもひのたこのるゝと一を付補
しるしなりけり

十六年甲申春正月五日諸卿大夫集安倍蟲麻呂朝臣家
宴歌一首　作者不審　一本此四字なし
吾屋戸乃君松樹爾零雪乃行者不去待西将待
わがやどのきみまつのきにふるゆきのゆきにはゆかじまちにしまたん
西一本西とあるはあれて待に続くと見るもよし又ハ行ハ行じ只待てあらんと云
古るす記もこの行けるなく…ぬ…のこと深く巻二にのせたるハ一を本結ぶ
ハまうじていへるハ聞きやしきとこと

同月十一日登活道岡集一株松下飲歌二首
一松幾代可歴流吹風乃聲之清者年深香聞
ひとつまついくよかへぬるふくかぜのこゑのきよきはとしふかみかも



巻三にたき悦ハ年深みとよみて年久しきをいふ
右一首市原王作
霊剋壽者不知松之枝結情者長等曽念
たまきはるいのちはしらずまつがえをむすぶこゝろはながくとぞおもふ
巻二有馬皇子の磐白の濱松が枝を引結びとよみたまひしハ松ハひさしく年經
るものなれバよそへていへるなるべし、むすびたる趣旨

右一首大伴宿禰家持作
傷惜寧楽京荒墟作歌三首　作者不審
紅爾深染西情可母寧楽乃京師爾年之歴去倍吉
くれなゐにふかくそみにしこゝろかもならのみやこにとしのへぬべき
紅ハ深く染しとらん為のことばなり　ならの都の深く心に
しみてあれバすみかくあれけても猶ふるさとへぬべくおもふといふ

若ヲ著ニ誤

世間乎常無物跡今曽知平城京師之移徙見者
よのなかをつねなきものといまぞしるならのみやこのうつろふみれば
生わらし歌のあれけりとみえくよのなかなきことゝしるゝ
石綱乃又變若反青丹吉奈良乃都乎又将見鴨
いはつなのまたをちかへりあをによしならのみやこをまたもみんかも
石づなの枕はうかれのそのかづらくあらバ二つひ又ちかへれと歌とせり
すくなきもみんとて光三吾生まるね變でもかくるよろしの歌と
みんとての来なんといひて本着とあるハ誤く一本若とある
よれり

悲寧樂故京郷作歌一首并短歌 一本京の字なきよろしかるべし
八隅知之吾大王乃髙敷為日本國者皇祖乃
やすみしゝわがおほきみのたかしかすやまとのくにはすめろぎの



窂ヲ窄ニ誤　鉤ハ駒ノ誤カ

神之御代自敷座流國爾之有者阿禮将座御子之嗣継
かみのみよゝりしきませるくにゝしあればあれまさんみこのつぎ〳〵
天下所知座跡八百萬千年矣兼而定家牢
あめのしたしらしまさんとやほよろづちとせをかねてさだめけん
平城京師者炎乃春爾之成者春日山御笠之野邊爾
ならのみやこはかぎろひのはるにしなればかすがやまみかさのゝべに
櫻花木晩牢貌鳥者間無數鳴露霜乃
さくらばなこのくれがくりかほどりはまなくしばなくつゆしもの
秋去来者射鉤山飛火賀塊丹芽乃枝乎石辛見散之
あきさりくればいこまやまとぶひがをかにはぎのえをしがらみちらし
狭男牡鹿者妻呼令動山見者山裳見貌石里見者
さをしかはつまよびとよめやまみればやまもみがほしさとみれば

里裳住吉物質之八十伴緒乃打經而　里並數者

さるもそみよしあふのやそとものをのうちへて、さとなみしけバ

天地乃依會限　萬世丹榮将往迹　思煎石

あめつちのよりあひのきはみ、よろづよにさかへゆかんとおもひし

大宮尚矣　恃有之名良乃　京矣　新世乃事爾之

おほみやをたのめりしならのみやこを、あらたよのことにし

有者皇之　引乃真爾真荷春花乃　遷日易

あれバおほきみのひきのまにまにはるはなのうつろひかはり

村鳥乃　旦立往者　刺竹之　大宮人能　蹈

むらとりのあさたちゆけバ、さすたけのおほみやひとのふみ

平之通之道者　馬裳不行　人裳往莫者　荒爾異類香聞

ならしかよひしみちハ、うまもゆかず、ひともゆかねバ、あれにけるかも



たつ志まハ言志らせまをえ、やまとハ大和く宮都の訓のうハ巻三の巡加うへいつ、

あれまさんハ生継給ひし将座一本座将とあれ、生をよまて彼あり、

いづれまろてまるべし、かきろひの稚ね、かれるハ早まるを開ぎとのなりへんと

爲にされき、射鈎山一本射駒とあるハ、又くなるのましまるくきはあるの八鈎

山まかんうと爲の従く、宮ちかにまやつる路をすすみなるハ、羽飼の係なりへ、

巻十ニ春日なる羽買の山ゆくしとよめるといへる、野ざ考べし、元史が塊一本

嵬とあるハ、いづれまそとべし、倭紀和銅五年正月大和國春日烽と書く、平城

ニ通よしてあへハとくつきせの係令のまとを書く志らせるハ、ま京くて

ハらちハ詞、まへハ延之、思並一本里並とまるとよしとして、天地の依あひのき

まみハ、天地のあ合まてをいふなく、天地のあらんかぎりといふのなし、往の下

の迹一本徳とあるハ、もとのかなへ、新代なるぞ移りつゞけまるを移るといふ、

引のまへハ天皇のひきゐるさせるまゝにといふく、春子のハうつすか

ちるといふ事をよせたり、村鳥の群行、往莫ハ下に言べけれど、よろしからず
例なし、さて此歌ハ續紀聖武天平十三年正月朔天皇始御恭仁宮受朝、
宮垣未就、繞以帷帳、天平十五年十二月辛卯初壞平城大極殿并歩廊、遷
造於恭仁宮、四年於茲其功纔畢、又此京ハ右のあくる年の事なれバ、此
京や人もまた遷ハざりしさまなるべし

反歌二首

立易古京跡成者道之志婆草長生爾異梨

たちかはりふるきみやことなりぬれバみちのしばくさながくおひにけり

或本ニ書花のうつろひの時といふをくはしくして立かハりのこら

ハ詞也

名付西奈良乃京之荒行者出立毎爾嘆思益

なつきにしならのみやこのあれゆけバいでたつごとになげきしまさる



郷ヲ卿ニ誤

みやこうつしハ和銅より未ハ此ころとびみなり

讃久邇新京歌二首并短歌

布當宮ハ瓶原郡とも見えたり
山城相樂郡之中七年讃ニ瓶原新都有也

明津神　吾皇之　天下　八島之中爾　國者霜

あきつかみわがおほきみのあめのしたやしまのうちにくにはしも

多　雖有　里者霜　澤爾　雖有　山並之　宜國跡

おほくあれどもさとハしもさはにあれどもやまなみのよろしきくにと

川次之　立合　郷跡　山代乃　鹿背山際爾　宮柱

かはなみのたちあふさとゝやましろのかせやまのまにみやばしら

太敷奉　高知爲　布當乃宮者　河近見　湍音叙清

ふとしきたてゝたかしらすふたぎのみやハかはちかみせのとぞきよき

山近見　鳥賀鳴慟　秋去者　山裳動響爾　左男鹿者

やまちかみとりがねとよむあきされバやまもとゞろにさをしかハ
妻呼令響。春去者岡邊裳繁爾。巖者。花開乎呼理。
つまよびとよめはるされバをかべもしゞにいはほにハはなさきをゝり
痛𪫧怜。布當乃原。甚。貴。大宮處。諾己曽。
あなおもしろ（あはれ）ふたぎのはらいとたふとおほみやどころうべしこそ
吾大王者。君之隨。所聞賜而。刺竹乃。大宮
わがおほきみハきみのまにまにきこしたまひてさすたけのおほみや
此跡。定異等霜
こゝとさだめけらしも

明神吾皇ハ則天皇をさしたる。山並よし、山しろハ山つゞきたる所なれバ
いへり。河次も山並といふにおなじく、川のつゞきたるをいふ。されバ立合さとゝ
いへるハ詞のあや。御ハ本御とあるハ誤也。鹿脊山ハ広野也。續紀に鹿脊山と





あり。ふたぎの宮ハ此地泉川の二方に落合所なれバ二方に落るの意なる
べし。慟ハ動の誤なるべし。巖者ハ花咲をゝりハ岩ほに花のさくがごとく
見ゆるさまをいふ也。あなおもしろハおもしろきを、あなおもしろといへる也
ほむる詞也。君のまにまにハ君がまにまにといふに同じ。かく山川のよろしき国と
きこしめしてよろしくおぼしめしたる也。刺竹の枕詞

反歌二首

三日原。布當乃野邊清見社。大宮處。定異等霜
みかのはらふたぎのぬべをきよみこそおほみやどころさだめけらしも

結句一本此跡標刺とあり。こゝと志めさせとよむべし。志めゆひてとする
よし

山高来川乃湍清石。百世左右。神之味将往。大宮所
やまたかくかはのせきよしもゝよまでかみしみゆかんおほみやどころ

山今ホ弓ヲ作る、先人云、山の峯ちの弓となれうを、といふ八此集ニも今
のめく橋立なれねバ峯ちるを又傳きつ、こともかひうぞ、之字ハ作倍
とあて、神さびといふ同じ

吾皇。神乃命乃。高所知。布當乃宮者。百樹
わがおほきみかみのみことのたかしらす、ふたぎのみやハもゝき
成。山者木高之。落多藝都。湍音毛清之。鶯乃。来鳴
なりて、やまハこだかし、おちたぎつ、せのともきよし、うぐひすのきなく
春部者。巖者。山下耀。錦成。花咲。乎呼里。
はるべハ、いはほにハやましたひかり、にしきなす、はなさきをゝり
左壮鹿乃。妻呼秋者。天霧合。之具禮乎疾。狭丹頬歴。
さをしかのつまよぶあきハ、あまきらふ、しぐれをいたみ、さにつらふ
黄葉散乍。八千年尓。安禮衝之乍。天下。所知食跡。



もみぢちり、やちとせに、あれつがしつゝ、あめのした、しろしめさんと
百代尓母不可易。大宮處
もゝよにも、かはるべからぬ、おほみやどころ

百樹成の成ハ如くといふ意なれども、ここは茂成ハ盛の意にて、
もゝハ数多きをいふ、森の用語と思ふて、猶あらばハいふべく、席の上の壮一本
壮年の人をよしとして、あまぎらふハ天の霧をあらはしたるなり、さらに
でゝ栖ね、あれつぐハ生継をいひたるなる、其一義原の大宮づくへ安
礼衛武(と識)ことなるを

反歌五首

泉川。往瀬乃水之。絶者許曽。大宮地。遷往目
いづみがはゆくせのみづのたえばこそ、おほみやどころうつろひゆかめ
泉川ホ坐れたる

布當山。山並見者。百代爾毛。不可易。大宮處

ふたぎやまやまなみみれバもゝよにもかはるべからぬおほみやどころ

嬬等之。續麻繫云。鹿脊之山。時之往者。京師跡成宿

をとめらがうみをかくとふかせのやまときのゆけれバみやことなりぬ

麻脊山もおなじ所なるべし。をとめらがうみをかくる麻とつゞくる枠といひかけて序とせり。桛ハ四時祭式に加世比。また古語拾遺に以桛之と[illegible]みをかくる具なり。[illegible]表字の[illegible]田ゐを京師となしていふ句じ

鹿脊之山。樹立矣繁三。朝不去。寸鳴響為。鶯之音

かせのやまこだちをしげみあさらずきなきとよもすうぐひすのこゑ

[illegible]

狛山爾鳴。霍公鳥。泉河。渡乎遠見。此間爾不通



こまやまになくほとゝぎすいづみがはわたりをとほみこゝにかよはず

一云渡遠哉。不通有武（ワタリトホミヤ カヨハザルラム）

狛山ハおなじ所也。[illegible]

[illegible]

春日悲傷三香原荒墟作歌一首并短歌

後紀天平十五年十二月更遷紫香樂宮仍停恭仁宮造作焉とあるを[illegible]程に[illegible]

三香原。久邇乃京師者。山高。河之瀬清。在吉迹。人者雖云。在吉跡。吾者雖念。故去之里爾四有者

みかのはらくにのみやこはやまたかくかはのせきよみすみよしとひとはいへどもありよしとわれはおもへどふりにしさとにしあれバ

國見跡人毛不通。里見者。家裳荒有。波之異耶之。
くにみれど。ひとゝかよはず。さとみれば。いへもあれたり。はしけやし
如此在家留可。三諸著。鹿脊山際爾。開花之。色目列敷。
かくありける。みもろつく。かせやまのまに。さくはなの。いろめづらしく
百鳥之。音名東敷。在杲石。住吉里乃。荒
もゝとりの。こゑなつかしく。ありがほし。すみよきさとの。あるゝ
樂苦惜喪
らくをしも

宣長云、或人の説に、是の在吉の在ハ住の誤なるべし、まことにありがほしき
里しあれどもといへる也、然るべし、耶の下一本之の字あり、されど
此なしはやしの下二句斗句の例なるに、三諸著一本天諸著とあり、
もは誤なり、又風武殺子、三諸ハ生諸の字の誤なるべし、さらばみと





て訓とつゞくる也、生諸ハ借字の借字也といへども、宣長云、著ハ弊の誤
みもろみをかくせるといひて、在杲石、字面よし、杲ハ古老切又下老切とも
ありてかほのあるなとかれのかみに借るべし、三ケ見杲石とかけるも、集中かほるとも
杲石をかほ、詞ハ其の欲しかくなりとて、ありがほしといふ、見まくほ
しをと見んが欲しといへる類也、哭一本喪とあるによる、あるらくハあ
るゝを延ていふ

反歌二首

三香原。久邇乃京者。荒去家里。大宮人乃。遷去禮者
みかのはら。くにのみやこは。あれにけり。おほみやびとの。うつりいぬれば
うつりいぬればハ遷者一本遷去とあるに從へり
咲花乃。色者不易。百石城乃。大宮人叙。立易去流
さくはなの。いろはかはらず。もゝしきの。おほみやびとぞ。たちかはりける

花のさかりハかりしわざなり。大宮人ハきりてまかるらん





難波宮作歌一首幷短歌 續紀天平十六年二月甲寅運恭仁高御座幷大楯於難波宮、又遣使取水路運漕兵庫器仗、乙卯恭仁京百姓情願遷難波宮者恣聽之とみゆ

安見知之。吾大王乃。在通。名庭乃宮者。不知魚取。

やすみしゝわがおほきみのありがよふなにはのみやハいさなとり

海片就而。玉拾。濱邊乎近見。朝羽振。浪之聲

うみかたつきてたまひろふはまべをちかみあさはふるなみのと

躁。夕薙丹。櫂合之聲所聆。曉之寐覺爾聞者。

さわぎゆふなぎにかぢのときこゆあかときのねざめにきけば

海石之塩干乃共。汭渚爾波。千鳥妻呼。葭部爾波。

あまいしのしほひのむたうらすにハちどりつまよびあしべにハ



鶴鳴動。視人乃。語丹為者。聞人之。視卷欲

たづなきとよみ見る人のかたりにすれバきく人のみまくほり

為。御食向。味原宮者。雖見不飽香聞

する。みけむかふあぢふのみやハみれどあかぬかも

此歌ハ難波京ハ度々幸ありしかれバこゝにいへり。海片つきてハ海辺

によりてといふ、濱邊一本濱徑に作る、はまぢとよむべし、朝羽ふる、

是二また同じ朝羽振風社よせめとこれに同じ。踐一本躁に作る集中錄字に踐

躁上俗下正 櫂ハ和名抄棹、釋名云在旁撥水曰櫂、亦作䑲漢語抄云加伊 櫂水中且進

櫂也とあつてハかぢと訓べし、合の字ハ衍文ならん、海石ハ石ハ原

の誤なるべし、又ハ若の誤か、うなばらのとよむべし、又ハ若の誤まれ、わたつみなるらんの

むたハ共といふ古語、汭一本納に作るとよしとて、集中をよくうらと

訓たり、一本ハ集中のよみとよくて人の語り継ぐバ、そとゆく人ハみえず

ほつえをさへいふへし、みけむかふ稱詞、味原ハ摂津東生郡にある所代迄
はだの名なるべし、集中同じ地を味経とも書り

反歌二首

有通難波乃宮者海近見漁童女等之乗船所見

ありがよふなにはのみやはうみちかみあまをとめらがのれるふねみゆ

塩干者葦邊爾蹊白鶴乃妻呼音者宮毛動響二

しほひればあしべにさわぐあしたづのつまよぶこゑはみやもとゞろに

蹊一本躁とあり同字なり さわぐとよめる例にてあるべしとあり

過敏馬浦時作歌一首并短歌

八千桙之神之御世自百船之泊停跡八島國

やちほこのかみのみよよりもゝふねのはつるとまりとやしまくに

百船純乃定而師三犬女乃浦者朝風爾浦浪



かこふなびとのさわぎてしみぬめのうらはあさかぜにうらなみ

左和寸夕浪爾玉藻者来依白沙清濱部者

さわぎゆふなみにたまもはきよるしらまなごきよきはまべは

去還雖見不飽諸石社見人毎爾語嗣

ゆきかへりみれどもあかずうべしこそみるひとごとにかたりつぎ

偲家良思吉百世歴而所偲将往清白濱

しぬびけらしきもゝよへてしぬばれゆかむきよきしらはま

八千桙の神ハ大己貴命の一の御名にて、よるいつるかく、少彦名命と
ともに天の下を経営しめる神なれバかくいへり、船純よりも、ふなびとと
よめるよし、けらしきを一相格良思吉といへるも同じ詞也、昔よりから湊
よくてしきの名のみとよめるなり

反歌二首

七八七ノ

真十鏡見宿女乃浦者百船過而可往濱有七國

まそかゞみみぬめのうらはもゝふねのすぎてゆくべきはまならなくに

まそかゞみ枕詞、みきのなをしぶるきをいふ

濱清浦愛見神世自千船湊大和太乃濱

はまきよみうらうるはしみかみよよりちふねのはつるおほわだのはま

ちふねは八千戈の神をいへれども神世とおもくいへり、大なぶ様ほど

右二十一首田邊福麻呂之歌集中出也

萬葉集巻第六



巻六追加

瀧上の御舟の山ほ云々、清清ハ藤原濱臣云、嶕嶢の誤なるべし、字彙嶕嶢深嶺也、保良又谷と有、慧林一切経音義ニ嶕嶢深嶺高峻也と有、さればふかみさやけみとよむべくや、又高峻のさまてたかみとしよむべしといへり、峻清の誤ならんと信しつれど字もいかにもく嶢の誤ニせらんかも知るべし、さてふかみたかくハ字義にはよくかなへれども

と訓べし

010190519177